

都留市埋蔵文化財調査報告第9集

山 梨 原 遺 跡

中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う発掘調査報告書

1982. 3

都留市教育委員会

日本道路公団東京第二建設局

都留市埋蔵文化財調査報告第9集

山 梨 原 遺 跡

中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う発掘調査報告書

1982. 3

都留市教育委員会
日本道路公団東京第二建設局

序

本調査は、中央高速自動車道富士吉田線西山線化工事に伴うもので、先に報告書を作製した堀之内原遺跡、中谷遺跡、宮脇遺跡に続く山梨原遺跡の発掘調査であります。

本調査は、昭和54年12月1日より昭和55年3月15日迄の調査期間で、調査面積は3,000平方メートルでした。

調査の実績としては、縄文時代前期・同時代中期の住居址、同時代前期の土塁、ならびに、歴史時代の土塁・溝状遺構が検出されました。

特に本調査は冬期中の作業で、農閑期を利用した農家主婦の作業員が多く、日頃の作業と違った馴れぬ作業に、更に、寒さにと、調査指導員も気くばりに大変骨の折れた作業がありました。

しかし、発掘された出土遺物の水洗い等は暖を囲み談笑しながらの整理作業で、一味違った田舎のいおり談義の一幕でもありました。

終りに、本調査のご指導をしていただいた各位、ならびに、日本大学考古学研究会・都留文科大学考古学研究会の学生諸氏に、敬意と感謝の意を表し、本調査報告の貴重な記録を上梓しご協力にお応えすべく努力することを誓いご挨拶いたします。

都留市教育委員会

教育長 内藤 益成

例　　言

1. 本書は昭和54年度に、日本道路公団東京第二建設局と、都留市教育委員会との委託契約により実施した、中火自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う山梨原遺跡の緊急調査報告である。本書作成の委託契約は、昭和56年度に行われた。
2. 本書の作成は、都留市教育委員会が行った。執筆・編集は、調査員が作成した調査カードをもとに奈良・谷口が行った。
3. 図版の作成は、奈良・谷口・平本・米沢・谷村が主に行った。その他、遺物整理及び報告書作成にあたり、都留文科大学考古学研究会の協力を得た。
4. 土器の復元は、奥 隆行先生にお願いした。
5. 遺物及び実測図は、都留市教育委員会が保管している。
6. 本調査の調査組織は、別に示すとおりである。
7. 発掘調査・報告書作成にあたって、次の諸氏に御教授を賜った。(敬称略)
木本 健・小野正文・坂本美大・田代 孝・新津 健(山梨県文化課)
堀内 真(富士吉田市教育委員会)・天野保子(西桂町教育委員会)・小林安典(都留考古学会)
一順不同一

調　　査　　組　　織

1. 調査主体者　都留市教育委員会
2. 調査担当者　奥 隆行(都留市文化財審議会委員)、奈良泰史(都留市教育委員会)
3. 調　　査　　員　喜多圭介・横山典夫・工藤信一郎・片山雅文・梅谷辰彦
4. 調査補助員　鈴木達仁・島村英之・林宏一・新藤恭子・海老名康江・宮元久美子
相良雅男・山根則子・守安幸代・宍戸美智子・伊藤正人・平林 彰
大野陽子・平 佐枝子・日向容子・和泉昭一(日本大学考古学研究会)
平本信雄・落合佐敏・小幡哲明・米沢伸二・谷村 聰・小野弘二・中村 総
石原喜恵子・室井祐子・中嶋信彰(都留文科大学考古学研究会)
谷口 栄(國立大学考古学専攻生)
5. 事　　務　　局　教育課長　棚本安男
社会教育係長　望月孝一
　　係　　奈良泰史
　　重原達也

目 次

序

都留市教育委員会教育長 内藤益成

例 言

調査組織

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
1 概要	1
2 日誌	1

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と自然環境	6
第2節 遺跡の考古学的環境	7

第Ⅲ章 層序

第1節 層序	9
第2節 層序と遺物	9
第3節 層序と造構	9
第4節 層序と火山堆積物	10

第Ⅳ章 発掘調査の成果と概要

第1節 第1地点の概要と成果	11
1 概要	11
2 造構	11
3 遺物	21
第2節 第2地点の概要と成果	39
1 概要	39
2 造構	39
3 出土遺物	44
第3節 第3地点の概要と成果	45
1 概要	45
2 造構	45
3 出土遺物	54

第4節 第4地点の概要と成果	55
1 概要	55
2 遺構	55
3 出土遺物	57

第V章 まとめ

第1節 概要	61
第2節 繩文時代の遺構	61
1 住居址	61
2 土塁	61
第3節 歴史時代の遺構	62
1 土塁	62
2 溝状遺構	62

挿図目次

山梨原遺跡位置図	5
第1図 山梨原遺跡地形図	6
第2図 都留市遺跡分布図	7
第3図 山梨原遺跡地点別標準土層柱状図	10
第4図 山梨原遺跡第1地点全体図	11
第5図 1号住居址平面図	12
第6図 2・3号住居址平面図	13
第7図 4号住居址平面図	14
第8図 1号土塁平面図	15
第9図 2号土塁平面図	15
第10図 3号土塁平面図	16
第11図 4号土塁平面図	16
第12図 5号土塁平面図・土層図	17
第13図 6号土塁平面図	17
第14図 7号土塁平面図	18
第15図 8号土塁平面図	18
第16図 第VI層上面A・B—8~10グリッド礫群	19
第17図 第VI層上面B—4グリッド付近集石	19
第18図 A・B—1~3グリッド小穴群	20
第19図 1号溝状遺構	21
第20図 2号溝状遺構	21
第21図 第1地点出土の土器実測図(1)	27
第22図 第1地点出土の土器実測図(2)	28
第23図 第1地点出土の土器実測図(3)	29
第24図 第1地点出土の土器拓影図(1)	30
第25図 第1地点出土の土器拓影図(2)	31
第26図 第1地点出土の土器拓影図(3)	32
第27図 第1地点出土の土器拓影図(4)	33
第28図 第1地点出土の土器拓影図(5)	34
第29図 第1地点出土の土製品実測図	34
第30図 第1地点出土の石器実測図(1)	37
第31図 第1地点出土の石器実測図(2)	38
第32図 山梨原遺跡第2地点全体図	40

第33図	1～3号土塙、1～4号溝状遺構平面図	41
第34図	4・5号土塙、5～8・11号溝状遺構平面図	42
第35図	6号土塙平面図	43
第36図	7・8号土塙、10号溝状遺構平面図	43
第37図	9号溝状遺構平面図	44
第38図	山梨原遺跡第2地点出土遺物	45
第39図	山梨原遺跡第3地点全体図	46
第40図	1～5号溝状遺構平面図	47
第41図	6～10号溝状遺構、1号土塙平面図	48
第42図	11～19号溝状遺構平面図	50
第43図	20～33号溝状遺構平面図	52
第44図	山梨原遺跡第3地点出土遺物	54
第45図	山梨原遺跡第4地点全体図	55
第46図	1～4号土塙平面図	56
第47図	1～4号溝状遺構平面図	58
第48図	山梨原遺跡第4地点出土遺物	60

表 目 次

第1表	縄文時代遺跡一覧表	8
第2表	第1地点出土土器一覧表	23
第3表	出土石器一覧表	36

図版目次

- 図版1 第1地点(1) 遺跡遠景(現在)
遺跡遠景
- 図版2 第1地点(2) 第1地点調査区全景
第1地点発掘調査風景
- 図版3 第1地点(3) 調査区中央部遺構分布状況
1号住居址(西南より)
- 図版4 第1地点(4) 2・3号住居址(南西より)
4号住居址(南西より)
- 図版5 第1地点(5) 2・3号住居址, 4・5号土塙(西より)
1・2号土塙(西より)
6号土塙(西より)
- 図版6 第1地点(6) 4号土塙(西より)
5号土塙完掘状態(北西より)
5号土塙上面礫群(南より)
- 図版7 第1地点(7) 第VI層中の礫群(南西より)
第VI層中の礫群(北より)
第VI層中の礫群(南より)
- 図版8 第1地点(8) 1号溝状遺構(西より)
2号溝状遺構(南より)
- 図版9 第1地点(9) 出土状態(第2群土器)
- 図版10 第1地点(10) 第1・2群土器
第3群土器
- 図版11 第1地点(11) 第3群土器
第3群土器
- 図版12 第1地点(12) 第3群土器
第3群土器
- 図版13 第1地点(13) 第3・4群土器
第4・5群土器
- 図版14 第1地点(14) 第6群土器
第7群土器
- 図版15 第1地点(15) 出土状態(第7群土器)
- 図版16 第1地点(16) 第7群土器
第7群土器

- 図版17 第1地点(1) 第7群土器
第7群土器
- 図版18 第1地点(2) 第7群土器
土器片錐、土製円盤
玩具
- 図版19 第1地点(3) 石器（石鏃・石匙・スクレイバー）
石器（打製石斧・横刃型石器）
- 図版20 第1地点(4) 石器（粗大石器）
石器（磨石）
- 図版21 第2地点(1) 調査風景
1～3号土塙（北から）
- 図版22 第2地点(2) 4・5号土塙（南から）
6号土塙（南から）
- 図版23 第2地点(3) 7号土塙（東から）
8号土塙（東から）
- 図版24 第2地点(4) 調査区西側の溝状遺構群（東南より）
5～7号溝状遺構（南より）
出土遺物（左・縄文土器、右・土師器）
- 図版25 第3地点(1) 調査風景
1～4号溝状遺構（西より）
- 図版26 第3地点(2) 1号土塙・6～10号溝状遺構（南より）
26～33号溝状遺構（東より）
出土遺物
- 図版27 第4地点(1) 調査風景
1号土塙（南より）
- 図版28 第4地点(2) 2号土塙（西より）
溝状遺構全景（西より）
- 図版29 第4地点(3) 出土遺物（縄文土器・土師器・須恵器）
出土遺物（陶器）
- 図版30 第4地点(4) 出土遺物（陶器・磁器・カワラケ・砥石・貨幣）

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

中央自動車道富士吉田線は、高井戸インターから河口湖インターに至る全長約92.3kmの高速自動車道である。本路線は、現在、高井戸インターから大月ジャンクションまでの約69.9kmは4車線であるのに、これより河口湖インターまでの約22.4kmは2車線という変則的なものとなっている。

昭和53年9月、山梨県教育庁文化課より中央自動車道富士吉田線大月ジャンクションから河口湖インターまでの4車線化工事計画の連絡と、それに伴う都留市内の埋蔵文化財包蔵地の照会があった。

照会に基づき、県文化課と共に、事業計画区内の埋蔵文化財包蔵地の踏査を実施したところ、掘之内原遺跡、宮脇遺跡、中谷遺跡、鹿の巣遺跡、山梨原遺跡の5遺跡が同路線建設予定地内に該当することが判明した。

そのため、日本道路公団東京第二建設局、県文化課、当教育委員会の三者で協議した結果、掘之内原遺跡は昭和53年度に、中谷遺跡・宮脇遺跡・山梨原遺跡は昭和54年度に、鹿の巣遺跡は昭和55年度に、それぞれ記録保存を目的として、当教育委員会と日本道路公団東京第二建設局との委託契約により、発掘調査を実施することになった。

これらの内、掘之内原遺跡は昭和53年10月5日～同年11月16日まで発掘調査を実施し、昭和55年3月、「掘之内原遺跡発掘調査報告書」として刊行されている。また、宮脇遺跡・中谷遺跡は昭和54年8月1日～同年11月15日（宮脇遺跡は8月31日）まで発掘調査を実施し、昭和56年3月「中谷・宮脇遺跡発掘調査報告書」として刊行されている。

当初、鹿留塙遺跡として、発掘届等の書類手づきをしたが、遺跡の主体部が山梨原地区にあったため、山梨原遺跡と遺跡名を改めた。

第2節 発掘調査の経過

1 概 要

山梨県都留市山梨原遺跡発掘調査は、昭和54年12月14日より、昭和55年3月5日まで、延べ38日間に亘って実施した。

本遺跡の調査区域は、東西300m、南北10mと細長く、また、区域内は道路によって四つに分断されるなどしているために、第1～第4地区と地区割りをして、地区毎に調査を進めることとした。以下、調査経過を、日を追って述べることとする。

2 日 誌

12月14日 第2地点の調査に入る。B—2～5・12～14・17～19・22～24・27～29トレンチ

- を調査する。B-2~5・17~19・22~24トレンチは、第IV層上面まで掘り下げ、落ち込みを検出した。B-12~14トレンチは、第VI層上面まで掘り下げ、落ち込みを検出。B-27~29トレンチは、第III層上面まで掘り下げ、落ち込みを検出した。
- 12月15日 第2地点。新たにB-7~9、A-12~14トレンチを調査する。B-7~9トレンチは、第IV層上面まで掘り下げ、落ち込みを検出した。A-12~14トレンチは、第III層・第V層上面において落ち込みを検出した。
- 12月16日 第3地点の調査に入る。B-12~14トレンチを第III層上面まで掘り下げ、落ち込みを検出した。
- 12月17日 第3地点。B-27~29・32~34・37~39トレンチを調査する。B-37~39トレンチは、第III層上面まで掘り下げ、落ち込みを検出した。
- 第4地点の調査を開始する。B-2~4・7~9・12~14・17~20トレンチを調査する。B-12~14トレンチは、第IV層上面で落ち込みを検出し、B-17~20トレンチは、第III層上面で落ち込みを検出した。
- 12月18日 第3地点。新たにB-2~4・7~9・22~24トレンチを調査する。B-2~4・32~34トレンチは第III層上面で落ち込みを検出し、他のトレンチは、第IV層上面で落ち込みを検出した。
- 第4地点。昨日、検出された遺構のプラン確認のため、A-12~14・17~20、C-17~20トレンチを調査する。
- 12月19日 第3地点。B-7~9トレンチは第III層、B-27~29トレンチは、第IV層上面でそれぞれ落ち込みを検出した。他のトレンチは、精査を行う。
- 第4地点。A-15、B-15グリッドを調査する。A-16、B-15グリッドは、第IV層上面で落ち込みを検出した。またA-18・19、B-18・19、C-18・19グリッドにおいて、第VI層上面で落ち込みを3個検出した。
- 12月20日 第4地点。A-12~15、B-14・15トレンチは、第III層上面で落ち込みを検出した。A-2~4、B-2~4トレンチは、第IV層上面で落ち込みを検出した。
- 12月22日 第3地点。検出された遺構のプランを確認するため、A-1~5、C-1~5、A-11~16、C-11~16、A-6~10、C-6~10、B-17~19トレンチを調査する。
- 第4地点。B-7~9トレンチ、A-11グリッドは、第III層上面で落ち込みを検出したため、プラン確認を行った。
- 12月23日 第2地点の調査を再開する。新たにA-21~30、B-21~30トレンチを調査する。
- 第3地点。A-1~6、B-7~9トレンチは、第III層上面で落ち込みを検出した。
- 第4地点。A-6、B-6グリッドは、第IV層上面で落ち込みを検出した。さらにピット1・2を調査する。新たにB-5グリッドにおいて検出された落ち込みを3号土壙とする。
- 12月25日 第2地点。新たにA-15~20、C-15~20トレンチを調査する。その結果第III層

上面で落ち込みを検出した。

第3地点。A-34~41, B-34~41, C-34~41トレンチを調査する。第III層上面まで掘り下げ、落ち込みを検出した。

第4地点。1・2号土塙を完掘後、平面図・エレベーション図を作成し、写真撮影を行った。その後、検出されていた1~4号溝状造構を調査する。

12月26日 第3地点。昨日に引き続き第III層上面の精査を行う。

第4地点。3号土塙を完掘後、平面図・エレベーション図を作成し、写真撮影を行った。

12月27日 第4地点。完掘した1~4号溝状造構の平面図・エレベーション図を作成し、その造構の写真撮影を行い、造構全体の写真撮影を行った。

12月28日 第4地点。造構全体図を作成した。

1月7日 第2地点。A-2~11, C-2~11, A-12~14, C-12~14トレンチ、B-4・5・10・11グリッドを拡張し、第IV層上面まで掘り下げる。

第4地点。B-2~4・7~9・11~14・16~19トレンチを第VI層から第VII層上面まで掘り下げる。その結果、造構は検出されず、第4地点の調査は、全て終了した。

1月8日 第2地点。今まで調査したトレンチを全て精査し、造構を再確認した。その結果、土塙8基、溝状造構11基を検出し、調査を行う。

1月9日 第2地点。全ての造構を完掘し、平面図・エレベーション図を作成し、写真撮影を行った。

1月10日 第2地点。全体図を作成して調査を終了する。

第3地点。造構を完掘した後、平面図・エレベーション図を作成し、写真撮影を行った。

1月11日 第3地点。平面図・エレベーション図・全体図を作成して、調査を終了する。

2月13日 第1地点の調査を開始する。B-8~12グリッドを第IV層から掘り始める。B-8~10グリッドにおいて第V層上面で縁の広がりを確認した。

2月14日 B-8~10グリッドを継続して調査する。疊群の平面図・エレベーション図を作成し、写真撮影を行い、その後縁を取り除いた。B-11・12グリッドは、第V層を掘り下げ第VI層に達した。

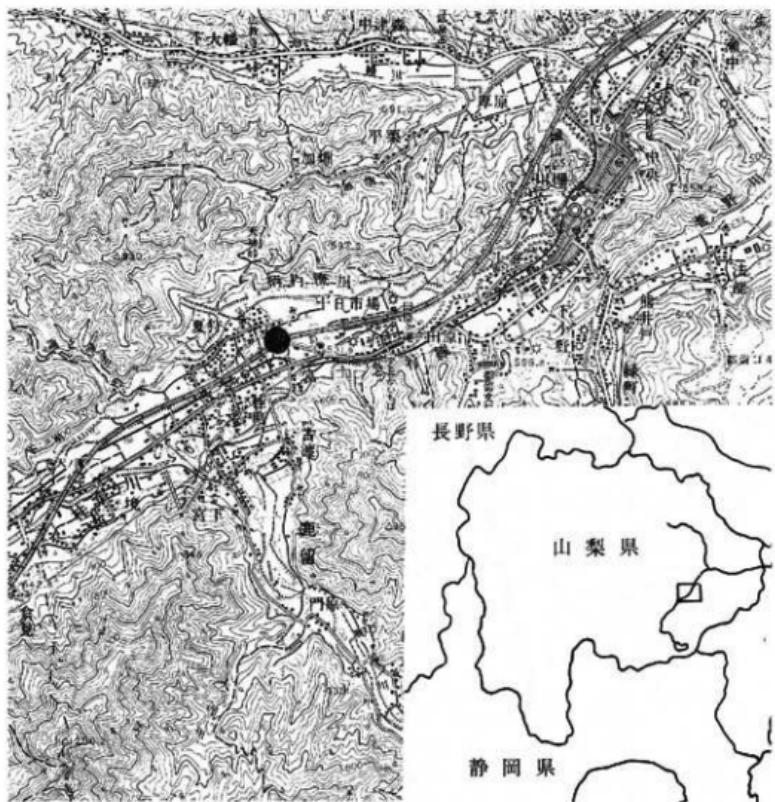
2月15日 A-8~12, B-8~12グリッドの調査を継続して行う。新たにA-1~7, B-1~7グリッドを調査する。A-8~10, B-8~10グリッドは、昨日取り除いた縁の下にはさらに縁が存在し、その平面図を作成する。A-1~7, B-1~7グリッドは、第IV層を掘り下げる。B-2・3、さらにB-5グリッドにおいて溝状造構2基を検出した。

2月16日 溝状造構は、完掘後、平面図・エレベーション図を作成した。A-1~6, B-1~6グリッドは、第IV層を掘り下げ、第V層に達した。

2月17日 B-11・12グリッドは、第VI層を掘り下げた。A-1~3, B-1~3グリッドは、第V層を掘り下げ、第VI層に達した。

- 2月18日 B-4~6グリッドで、住居址の床面と思われる部分を検出した。(1号住居址)またA-4グリッドでは落ち込みを検出した(1・2号土塙)。B-6~8グリッドにおいて、落ち込みを検出し、その規模から住居址と推定された。(2号住居址)。
- 2月20日 2号住居址の調査中、2号住居址を切って重複する落ち込みを検出した。新たに、A-8・9、B-8・9グリッドで検出された落ち込みを4号土塙とし、調査を進める。1号土塙は半敷し、底面を確認。1号住居址は、柱穴を11箇検出した。2号住居址の南北方向にサブトレンチを設定し、重複する落ち込みと住居址の床面の検出に努めたところ、重複する落ち込みは住居址であることが判明し、3号住居址と命名した。また、A-8・9、B-8・9グリッド、及び、B-9・C-9グリッドで礫群下より落ち込みを検出し、4・5号土塙と命名した。4号土塙は半敷し、底面を確認。5号土塙は礫が集中しているので注意しながら掘り進めた。
- 2月21日 各遺構の写真撮影を行った後、セクション図を作成し、完掘し、平面図・エレベーション図を作成した。B-11・12グリッドは、土層観察のためローム漸移層まで掘り下げた。1ライン・Cラインでセクションを引き、写真撮影を行った。
- 2月22日 B-11・12グリッドのセクション図作成、再度写真撮影を行った。A-1~5、B-1~5グリッドは、第VII層を掘り進めた。B-2グリッドから乳房状を呈する尖底部が出土した。
- 2月23日 A-1~5、B-1~5グリッドは、昨日に引き続き、第VII層を掘り進めた。B-4グリッドで集石遺構が検出され、平面図・エレベーション図を作成した。B-1~2グリッドからは、黒色土の落ち込みを検出、7号土塙と命名した。
- 2月24日 5号土塙の壁検出に努める。その結果、底面に移多するに従いロート状にすばまることが判明した。
- 2月25日 7号土塙完掘。平面図・エレベーション図を作成した。2号住居址の床面を精査、柱穴を5箇検出した。2・3号住居址とも平面図・エレベーション図を作成し、写真撮影を行った。
- 2月26日 5号土塙は、確認面から約100cmのところで底面に達した。A-1~5、B-1~5グリッドは、第VII層の掘り下げを継続する。
- 2月27日 A-1~5、B-1~5グリッドは、第VII層に達した。5号土塙完掘。平面図・エレベーション図を作成した。
- 2月28日 悪天候につき、第3地点において、土層観察図作成のため2×6mのトレンチを3本設定し、深掘りをする。うち1箇所は、溶岩礫が多量に包含するため作業を中止した。
- 2月29日 A-1~5、B-1~5グリッドは、第VII層を掘り下げ、第IX層(ローム漸移層)まで達した。A-5~7、B-5~7グリッドからは、第VII層中より剝片や磨石の破片が集中して出土した。2号住居址の床面にサブトレンチを設定し、掘り下げたところ、新たに床面と思われる面を検出したため、拡張し範囲を追求した。その結果、柱穴と焼土を検出し住居址であることが判明したので、4号住居址と命名した。

- 3月2日 4号住居址の調査を繼續した。完掘した後、平面図・エレベーション図を作成し、写真撮影を行った。C-10グリッド付近において、第VII層から条痕文系土器が、一括して出土した。
- 3月3日 B-6~8、C-6~8グリッドを掘り進み、第IV層下面まで掘り下げる。C-8グリッドにおいて、押型文土器片が出土した。
- 3月4日 A-6~10、B-6~10、C-6~10グリッドを第IX層まで掘り下げる。A-10グリッドにおいて、落ち込みを検出し8号土塙と命名する。
- 3月5日 8号土塙を半截し、セクション図を作成した後、完掘し、平面図・エレベーション図を作成した。調査図の土層観察図を作成し、第1地点の調査を終了した。



山梨原遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

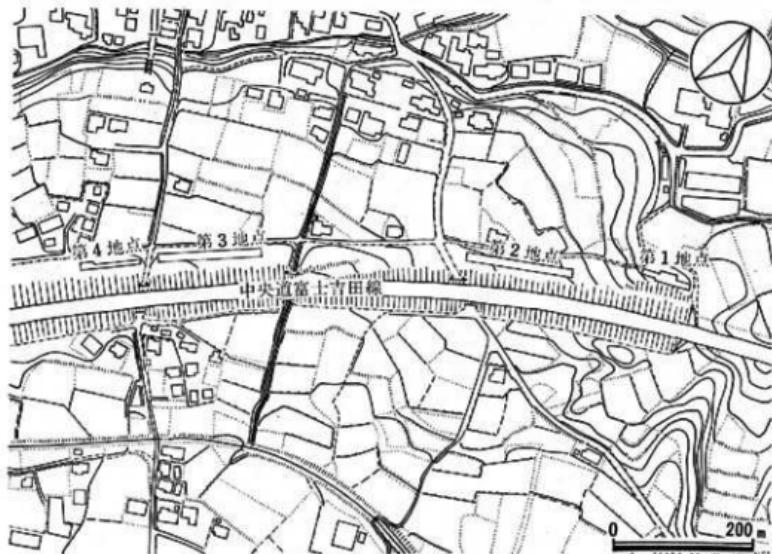
第1節 遺跡の位置と自然環境

中部山岳地帯の南東に位置する山梨県は、地形上、甲府盆地を中心とした富士川水系に属する地域と、相模川、多摩川両水系に属する山梨県東部の、二つの地域に大別され、関東山地から連なる御坂山地が、この二つの地域を隔てる分水嶺となっている。

山梨県東部域は、山間地で平坦地こそ少ないが、多摩川水系に属する丹波川、小菅川および、相模川水系に属する桂川、鶴川、道志川、秋山川の各流路には河岸段丘が発達し、数多くの遺跡が立地している。

富士山の豊富な湧水を源とし山梨県東部を流れる桂川は、都留市内において、柄杓流川、菅野川、朝日川、大幡川等の各支流と合流する。この各流域には河岸段丘が発達し、縄文時代の遺跡を中心に、数多くの遺跡が立地している。

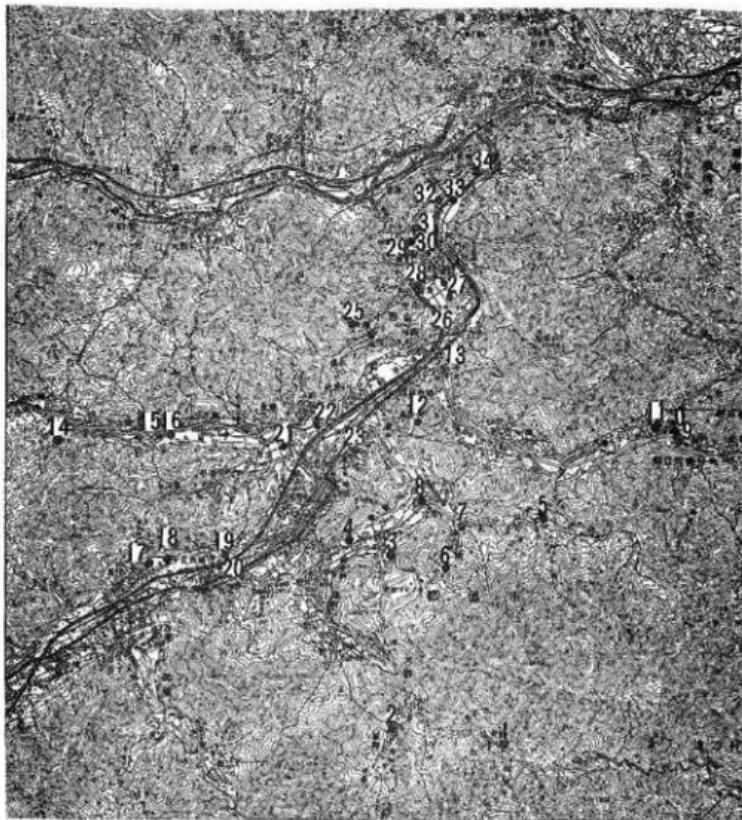
山梨原遺跡は、都留市夏狩字山梨原に所在し、富士山から流出した溶岩台地上および末端に位置する。この溶岩台地の末端部、遺跡の北側には豊富な湧水が湧き出ている。



第1図 山梨原遺跡地形図

第2節 遺跡の考古学的環境

都留市内では現在64遺跡が知られている。この内縄文時代の遺跡は34遺跡で、第2図のように桂川の各支流の河岸段丘上に分布している。これらの遺跡は、発掘調査や工事中発見されたものもあるが、ほとんどが表面採集で確認されたものであり、この採集土器より各遺跡ごとの時期を調べると、第1表のようになる。これより当市内における遺跡は、発見される土器型式が数型式の短期的使用が行われたものが大半で、特に、縄文時代前期諸磯b式期を境に縄文時代中期後葉曾利式期までの遺跡が群を抜く。山梨原遺跡は今回の調査で初めてその内容が明らかになった遺跡で、出土遺物は縄文時代早期から同時代後期におよぶものであったが、その内容は他の遺跡と



第2図 都留市遺跡分布図

同様に断続的に長期使用がなされたものであった。山梨原遺跡は大明見溶岩流上とその末端部に位置する遺跡であるが、大明見溶岩流上の周辺遺跡としては、南西側約3kmに縄文時代後期の庵留座遺跡があり、溶岩流末端部周辺では湧水および湧水から流出する小川沿いに、御戸海戸・おいしがね・馬場舟等の縄文時代前期・中期を主体とする各遺跡が立地する。これらの内、馬場舟遺跡は昭和49年に発掘調査が実施され、諸磯C式土器を主体として、縄文時代早期から同時代中期の遺物が検出されている。

第1表 楚文時代遺跡一覽表

第Ⅲ章 層序

第1節 層序

山梨原遺跡の標準層序は、ほぼ15層に分かれる。

第Ⅰ層（表土層） 工事用道路建設時に敷かれたと思われる瓦礫混りの土層。

第Ⅱ層（暗褐色土層） 工事用道路建設前の表土層（耕作土）と思われる。

第Ⅲ層（黒褐色土層） 赤色粒子、2mm大のスコリアを若干含有。粘性は強い。

第Ⅳ層（黄褐色土層） 黄褐色スコリアを多量に含有し、全体的に砂粒状を呈する。

第Ⅴ層（暗褐色土層） 2~3mm大の大粒のスコリアを若干含有。全体的に粘性はなく、細かな砂粒状の土層である。本層は黒色火山灰層を主として形成されているものと思われる。

第VI層（暗茶褐色土層） 1~3mm大の灰色スコリアを多量に含有。

第VII層（褐色土層） 1~2mm大の黄褐色スコリアを多量に含有。

第VIII層（茶褐色土層） 1~3mm大の大粒の赤褐色スコリアを若干含有。10~30cm大の溶岩礫が若干混入。

第IX層（ローム漸移層）

第X層（ローム層） 褐色土を若干混入した黄褐色土、粘性はやや強く、スコリア含有。

第XI層（スコリア層） 橙色・赤色スコリアによって構成されている。

第XII層（ローム層） 明赤褐色土層・赤色・黄色粒子を若干含有。

第XIII層（ローム層） 明赤褐色土層、スコリア、赤色粒子を若干含有。粒子は第XII層に比して細かい。

第XIV層（ローム層） 赤褐色土層、粘性は強い。赤色スコリアをかなり含有、下部はスコリアの純層に近いものとなっている。

第XV層（泥流堆積層） 溶岩礫、スコリア、赤褐色土が混在し、非常に固く、凝固しているかのような土層である。

第2節 層序と遺物

山梨原遺跡における層序と遺物との関係は、第V層中では縄文内1式が、第VI層中では下部より諸機b・c式・十三菩提式・五鈴カ台式・藤内1式が、第VII層中上部では、諸機b・c式・十三菩提式・藤内1式が、下部では押型文・燃糸文系土器が、第VIII層では燃糸文系土器が、それぞれ出土した。

第3節 層序と遺構

山梨原遺跡における層序と遺構との関係は、第VIII層（第2~第4地点）・第IV層上面（第1地点）が、溝状及び円形状ビットの検出面となり、第II c層及び第III層がその覆土となっている。

これらの溝状及び円形状ビットの構築年代については、出土遺物がほとんど認められず、詳細は不明である。わずかに出土遺物と呼べるのは、第4地点No.2ビットより若干の土師質土器片及

び古錢（政和通宝）1枚が出土したのみである。

第1地点で発見された縄文時代の遺構検出面は、第V層（第8号址）、第VI層（第1・3～7・9・13号址）、第VII層（第11号址）であった。

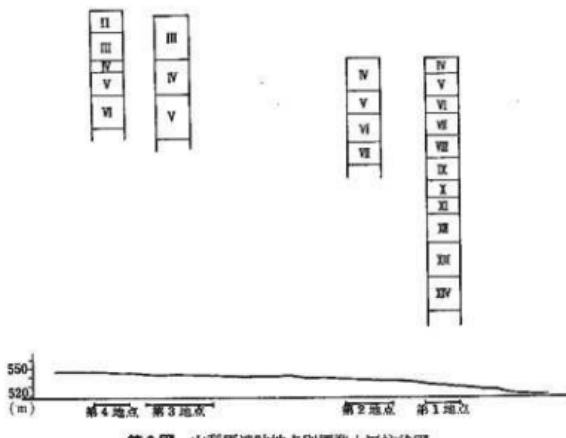
第4節 層序と火山堆積物

山梨原遺跡では、第IV層・第VI層・第VII層中において、スコリア層が検出された。第IV層中のスコリアは、1～2mm大の黄褐色を呈するもので、同層中、特に下部において密に認められた。第VII層中のスコリアは、1～3mm大の灰色を呈するもので、同層上部において、5～10cmの厚さで認められた。第VI層中のスコリアは、1～3mm大の黄褐色を呈するもので、特に、第2地点において顕著に認められ、同層下部においては、10～30cm大の溶岩礫混りの純層として認められた。第2～4地点では、第VII層下は溶岩（大明見溶岩流）となっている。

第V層は、同遺跡において、堀ノ内1式の遺物包含層となっているが、同層は、2～3mm大の大粒のスコリアを若干含有した黒色火山灰層である。

本遺跡において、富士山の火山活動の影響を物語る資料としては、第2～4地点、第VII層下において認められた大明見溶岩流、第IV層・第VI層・第VII層中で認められたスコリア層、第V層を形成している黒色火山灰層などが検出された。

これらの内、大明見溶岩流は、富士山より発して、富士吉田市大明見を流れ、都留市十日市場にまで達している。第2地点は、この先端部上に位置し、この大明見溶岩流の末端に当る第1地点との比高は約8mを計る。この大明見溶岩流の流出時期については、不明とされているが、本遺跡における発掘調査での観察所見は、第1地点において、この溶岩礫を用いた配石及び集石遺構に諸磧b式土器が主体的に伴っていることから、諸磧b式段階には、すでに存在していたものと思われる。



第3図 山梨原遺跡地点別標準土層柱状図

第Ⅳ章 発掘調査の成果と概要

第1節 第1地点の概要と成果

1 概 要

第1地点は、本遺跡の最も東側で、大明見溶岩の縁辺部に位置する。この大明見溶岩の縁辺部には、各所で湧水が認められる。本地点、北側にも豊富な湧水が存在する。

本地点では、第4図のように、調査区を設定した。調査区西側は、大明見溶岩が堆積しているために、調査は不可能であった。

2 造 構

本地点では、绳文時代の造構として、住居址4軒、土塙9基、集石1基、砾群、小穴址等が検出された。

これらの内、1・2号住居址は一部が調査対象区域外に在り、完掘できなかったが、プランは円形を呈するもの（1・3・4号住居址）、隅丸方形を呈するもの（2号住居址）が認められた。

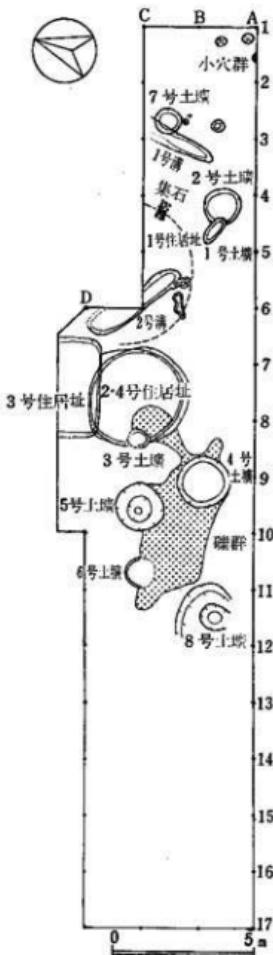
土塙はほとんどが円形で、タライ状を呈するものが大半を占める。

（1）住居址

1号住居址

B-4～6グリッドに位置する。第IV層上面を精査中、床面と思われる硬質面の広がりを検出したため注意していた所、半円形に巡る小穴を検出した。小穴は柱穴址と解され、Bラインのセクションを検討した結果、不鮮明ながら壁の立ち上がりが認められ住居址と認定した。

形態・規模については、北半分が調査区域外のため不明瞭であるが、柱穴の並び方、床面の広がりから、円形プランを呈し、直径約4.7mを測るものと推定される。壁は精査したが覆土の色別が困難を極め、残念ながら検出できなかった。柱穴は11ヶ所検出され、P1～7は壁に沿って巡るものと思われ

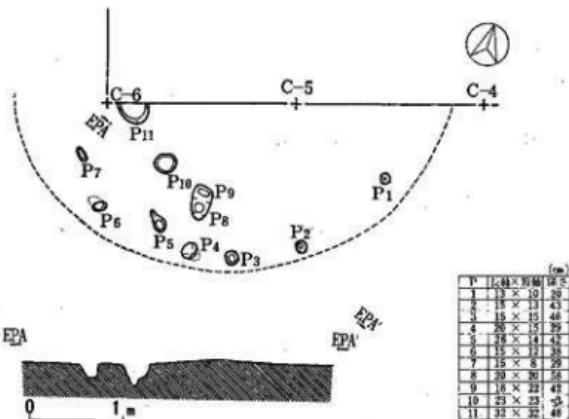


第4図 山梨原遺跡第1地点全体図

る。床面は平坦であり、一様にしまっているが、特に柱穴の周囲が硬くしまっていた。炉址は検出されなかった。

出土遺物は貧弱で、縄文時代後期彌ノ内1式の小破片が若干出土したのみであった。

本住居址の所属時期は、出土遺物や構築面から縄文時代後期彌ノ内1式期に求められる。



第5図 1号住居址平面図

2号住居址

B : C-6～8グリッドに位置する。第IV層上面より掘り込まれた住居址で、北側を3号住居址によって切られている。形態は不整円形を呈するものと思われる。規模は南北方向で約3.5m、高は東壁で12cmを測る。床面は平坦であるが、軟弱であった。柱穴は5ヶ所検出され、P1・3・4・5は深さも50～60cmを割り主柱穴と考えられる。炉址は検出されなかった。

出土遺物は縄文時代前期諸磯b式（第25図34）・同c式・十三苦提式（第25図39）・中期藤内1式（第26図46）などの小破片が覆土中より若干出土したが、本住居に伴う遺物は不明確であった。

本住居址の所属時期は、出土遺物からは判断できないが、3号住居址（縄文時代中期藤内式期）に切られており、本住居址の下から4号住居址（縄文時代前期諸磯b式期）が検出されていることから、4号住居址廃絶以降、3号住居址構築以前の時期に求められる。つまり縄文時代前期後半～中期前半の時期の中に位置付けられよう。

3号住居址

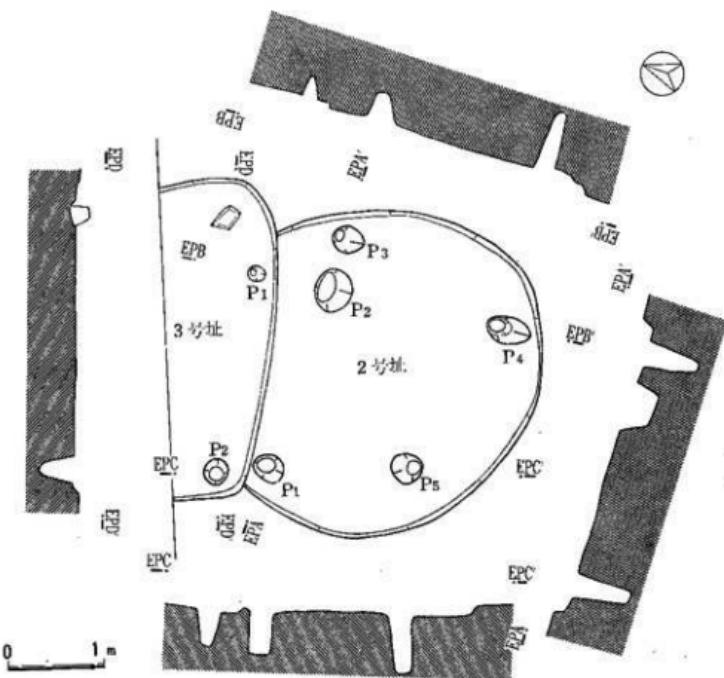
C-6～8グリッドに位置する。2号住居址のプラン確認作業中に北側を切っている落ち込みを検出したもので、調査区の北側を試張した結果、明確に捉えることができた。

形態・規模については、本住居址のはほとんどが北側の調査区域外に広がっているため、全容は明確でないが、一辺3.3m程度の隅丸方形を呈すると思われる。壁はゆるやかに立ち上がり、西

壁で約7cmを測る。床面は平坦で、軟弱であった。

出土遺物は床面及び覆土中から縄文時代中期藤内1式（第26図52・53）が出土し、また同前期諸腹b式や磨石も覆土中より出土した。

本住居址の所属時期は、出土遺物から縄文時代中期藤内式期に求められよう。



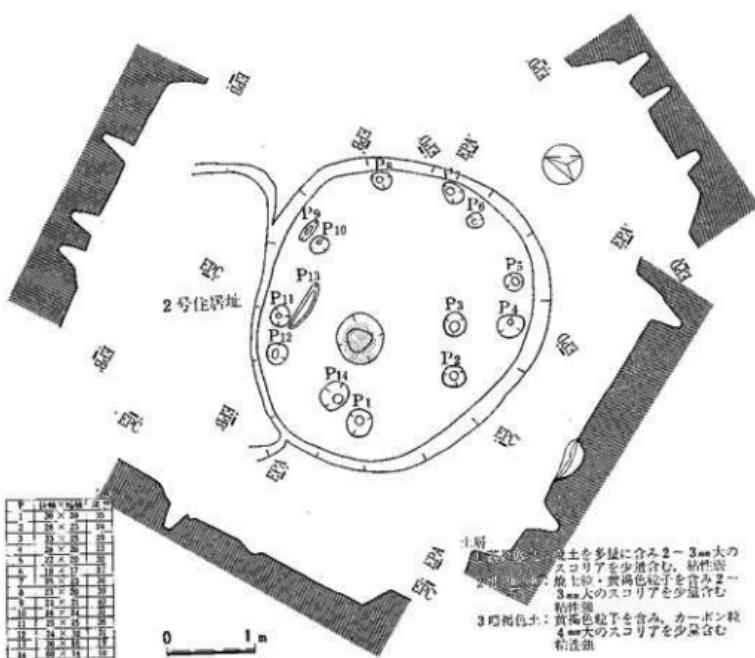
第6図 2・3号住居址平面図

4号住居址

B～C—6～8グリッドに位置する。2号住居址調査終了後、床面に試掘坑を設定したところ、床面らしいものを確認したので、拡張しその範囲を追求し住居址であることが判明した。本住居址は2号住居址と重複しており、3号住居址に北側を切られていた。

形態は不整円形を呈するものと思われ、主軸に合わせ北西方向から南東方向に広がる傾向がある。規模は約3.7m×約3.3m、壁は垂直気味に立ち上がり西壁で約40cmを測る。小穴は14ヶ所検出された。P14は柱穴とは考えられないが、他は柱穴と思われ、およそ五角形を呈する様に配置される傾向が看取されよう。床面は平坦で、硬くしまっていた。炉址は床面を掘り込んだ地床炉で、住居址中央よりやや北側に偏置されている。炉は約55cm×60cmの規模を有し、円形プランを呈し、深さ-12cmを測る。

出土遺物は縄文時代前期諸様b式の土器片が覆土中より出土した。



第7図 4号住居址平面図

(2) 土 壤

1号土壌

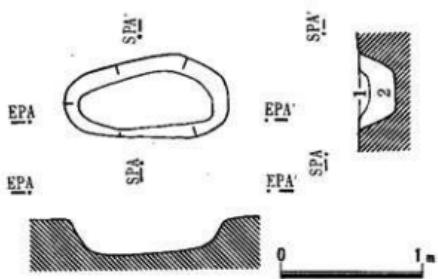
A-2グリッドに位置する。第VI層上面より2号土壌を切って構築されている。

形態は長楕円形を呈し、規模は長軸117cm×短軸56cm、深さは確認面より-23cmを測る。床面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は2つに細分され、1層はスコリア層、2層は1~3mm大のスコリア、赤褐色粒を含有した暗褐色土である。出土遺物なし。

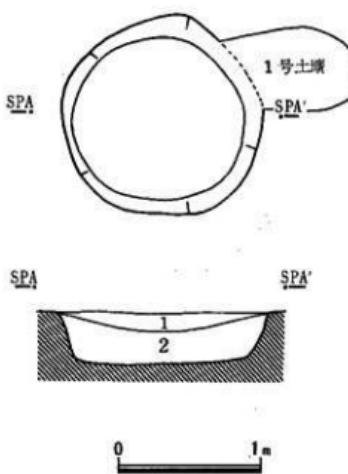
2号土壌

A-3・4グリッドに位置する。第VI層上面より構築されており、西壁の一部を1号土壌によって切られている。

形態は円形を呈しており、規模は長軸・短軸とも約140cm、深さは確認面より-37cmを測る。床面は平坦で、軟弱であった。壁は垂直な形で立ち上がる。覆土は2つに細分され、1層は赤褐色粒、カーボン粒を含有した粘性の強い暗褐色土。2層は1層と同様の含有物を含む粘性強い茶褐色土。出土遺物は打製石斧（第30図11）磨石（第31図21）などが出土した。



第8図 1号土壠平面図



第9図 2号土壠平面図

3号土塁

B-8グリッドに位置する。2号住居址の覆土を切って構築しており、北側半分は明瞭に検出できなかった。

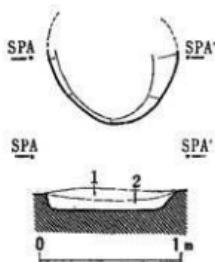
形態はほぼ円形を呈するものと推定される。規模は東西方向で94cm、深さは確認面より-15cmを測る。床面は平坦で、軟弱である。壁は西側で垂直気味に立ち上がるが、東側でゆるやかに立ち上がる。覆土は2つに細分され、1層は粘性弱く、赤褐色粒、黄褐色粒、カーボン粒、3~4mm大のスコリアを含有した褐色土。2層は粘性強く、赤褐色粒、黄褐色粒を含有した茶褐色土である。出土遺物なし。

4号土塁

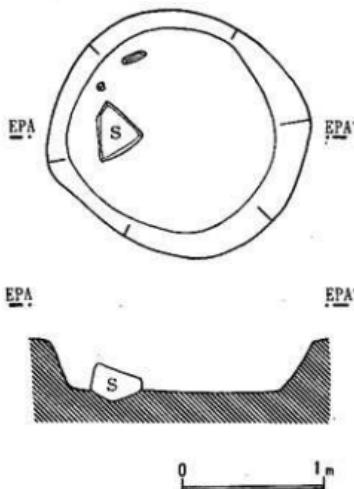
A・B-8・9グリッドに位置する。第VI層上面から構築されており、形態は円形を呈している。規模は長軸186cm×短軸165cm、深さは確認面より-15cmを測る。床面は平坦で、しまっており、南側には44cm×36cm×37cmの三角形を呈する偏平な石が置かれた状態で出土した。上面は磨りへっており、凹状を呈している。おそらく砥石のような役割を果したものと推察される。覆土は赤褐色粒、カーボン粒を含有した茶褐色土。出土遺物は縄文時代前期諸種b式土器片が認められた。

5号土塁

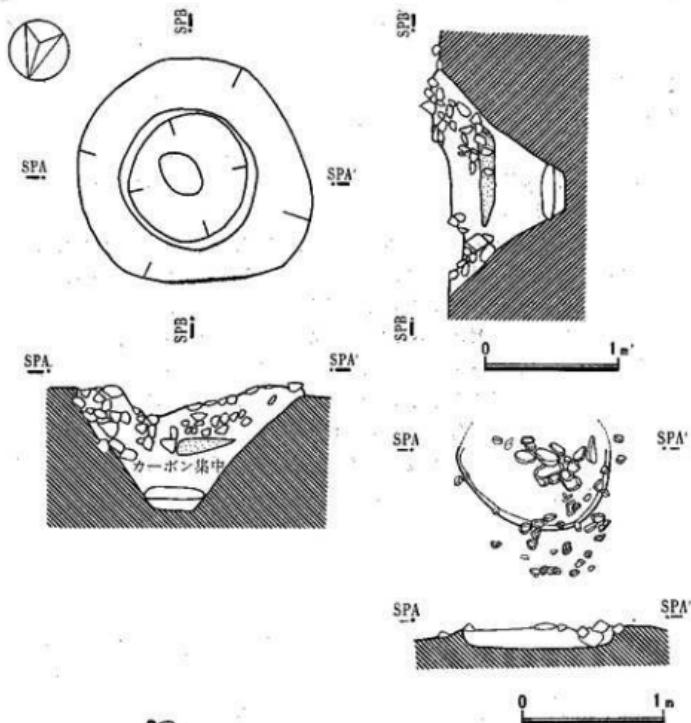
B・C-9グリッドに位置する。第VI層上面から構築されており、形態はほぼ円形を呈し、上面から底面に移行するに従いぼんやりと増す“ロート状”を呈している。規模は長軸187cm×短軸178cm、深さは確認面から-96cmを測る。覆土上部には5~15cm大の溶岩礫が密集した集石を持っており、深さ-30cmのレベルでカーボンが約10cmの厚さでレンズ状に堆積し、また深さ-65cmの所に45cm×50cmの偏平な礫が置かれた様な状態で検出された。底面付近には特にカーボンの集中が見られた。覆土は3つに細分され、1層は黄褐色スコリアを多量に含有した黄褐色土。2層は多量のカーボンと少量の焼土粒、2~3mm大のスコリアを含有した褐色土。3層は多量のカーボンと少量の焼土粒を含有した黒褐色土である。出土遺物は時期不明の縄文土器小破片が出土した。



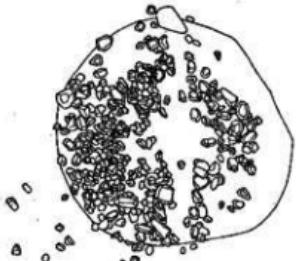
第10図 3号土塁平面図



第11図 4号土塁平面図



第12図 5号土壌平面図・土所図



(土壌上面の種の分布)

第12図 5号土壌平面図・土所図

6号土壌

C-10グリッドに位置する。第VI層上面から構築されており、南側半分は覆土は判別が困難で明確に検出できなかった。形態は円形を呈すると思われ。覆土上部に集石が構築されている。規模は東西方向105cm、深さは確認面より-15cmを測る。床面は平坦で、軟弱である。壁は垂直気味に立ち上がる。覆土はカーボン粒、焼土粒を含有した褐色土。出土遺物は縄文時代早期茅山式土器の小破片が

少量出土した。

7号土塁

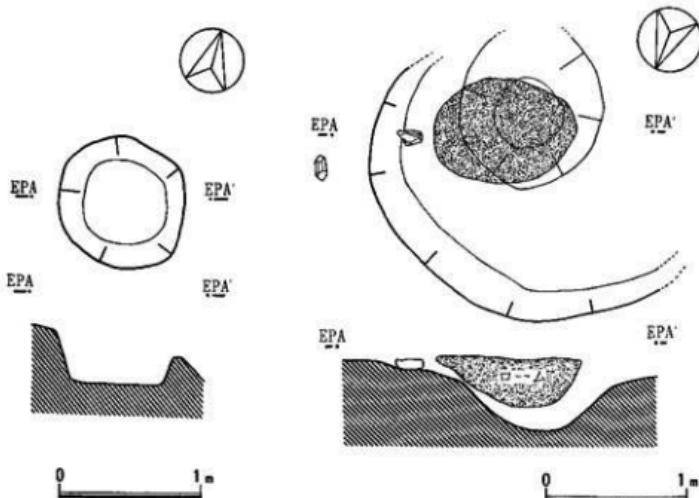
B-2グリッドに位置する。第VII層上面から掘り込まれ、ローム層を切って構築されている。形態は円形を呈しており、規模は長軸・短軸とも約100cmで、深さは確認面より-36cmを測る。床面は平坦で、しまっており、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土。出土遺物なし。

8号土塁

A-10グリッドに位置する。第IX層上面で確認されたもので、南・西側は調査区域外のため全容は不明であるが、形態はおよそ円形を呈すると思われる。一旦なだらかに落ち込んだ後、中央付近がさらに深く掘り込まれていて、その深みに暗褐色に包まれるようにローム塊がある。規模は直径約240cm程度と推定され、深さは確認面から-52cmを測る。

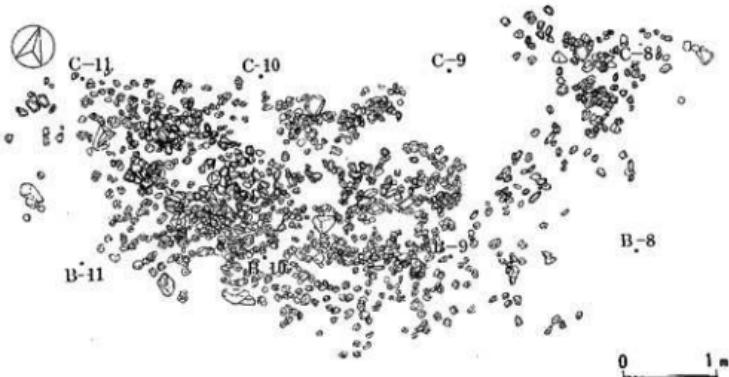
以上、本地点で検出された土塁について記述したが、その機能・性格については不明と言わざるを得ない。しかし、その中にあって、2・4・5号土塁は特異な存在であった。2号土塁は石器類を収蔵したような状況を呈していた。4号土塁は砾石状の石が設置されており、作業場的な機能を想像させる。5号土塁については、今後の類例の増加を待ちたい。

各土塁の構築時期は、1・2・4~6号土塁とも第VI層上面から構築されているため、縄文時代前期諸畿b期を中心とした時期に求められよう。3号土塁は2号住居址発掘以降に、7号土塁は、その構築面から縄文時代早期のものであろう。8号土塁は構築面が不明であるが、調査時の所見から諸畿式期以前と思われる。尚、8号土塁は各地で検出されている所謂“風倒木痕”的特徴を備えている。

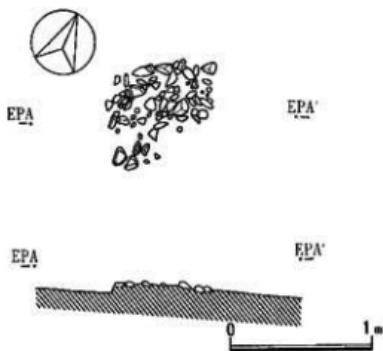


第14図 7号土塁平面図

第15図 8号土塁平面図



第16図 第VI層上面A・B-8~10グリッド石群

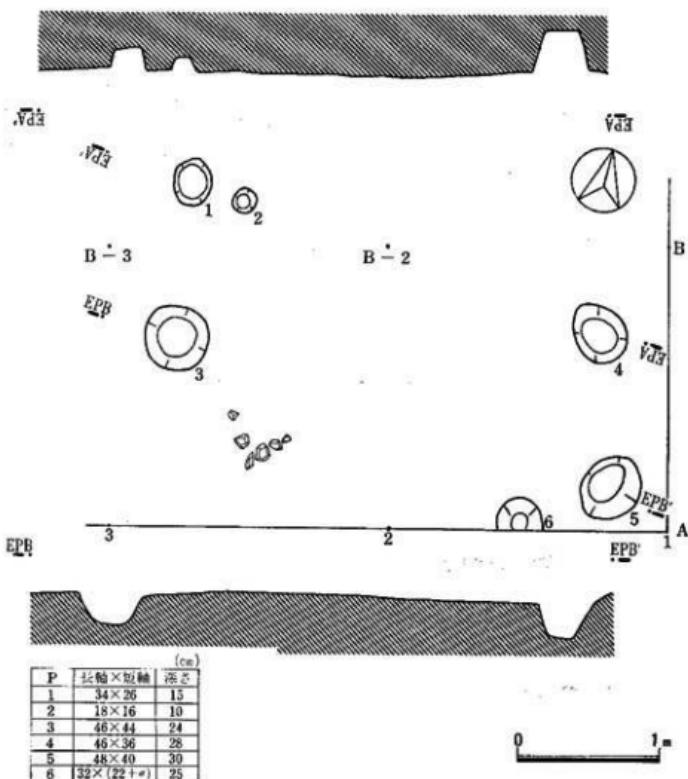


第17図 第VI層上面B-4グリッド付近集石

(3) 磚群・集石

第VI層上面で、A・B-8~10グリッドにかけて、第16・17図の様に拳大の滑岩磚が同一レベルで密集した状態で検出された。磚の分布状況から北側の調査区域外に広がるものと思われる。磚に混って、縄文時代前期諸磚b式の土器片が出土した。

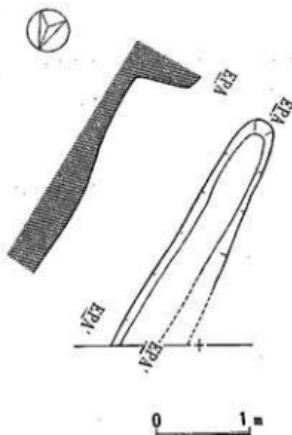
また、第VII層上面のB-4グリッド付近で、約75cm×75cmの方形状に密集した集石が認められた。出土遺物なし。



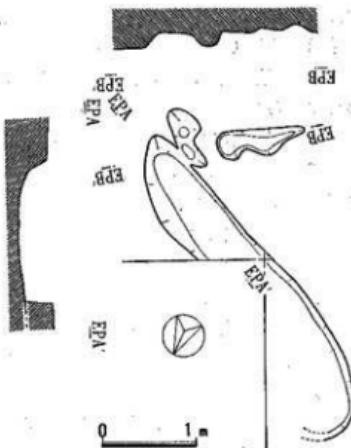
第18図 A・B-1~3 グリッド小穴群

(4) 小穴群

A・B-1~3 グリッドで検出された6個の小穴址を、便宜的に群として捉え、説明を加えることにしたい。検出された6個の小穴は、第IV層上面の精査作業中に確認されたものである。住居址の存在を想定し、慎重に精査を行ったが、特別な遺物の出土状況も見られず、硬質化した部分も検出されなかった。また、東壁セクションにも検討を加えたが、遺構らしき落ち込みは無かった。この様に、住居址と認定される状況は見られず、各小穴が独立したものか、関連をもつものか詳細は不明である。時期的には、縄文時代後期頃のものと思われる。



第19図 1号溝状造構



第20図 2号溝状造構

(5) 溝状造構

1号溝状造構

A・B-2・3グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は北側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ $270 + \alpha$ × 幅64cm、深さは確認面より -56cm を測る。覆土は茶褐色土。出土遺物は時期不明の縄文上器小破片が少量出土した。

2号溝状造構

B-5, C-6グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。西壁の一部が調査区域外にかかっている。規模は長さ 376 cm × 幅70cm、深さは確認面より -34cm を測る。覆土は茶褐色土。出土遺物はなし。本造構の南西部に小穴が検出されたが、本造構との関連は不明である。

3 遺 物

(1) 土 器

本地点からは、縄文時代早期～同時代後期までの土器が認められた。以下、時間的経過に重点をおくことによって山梨原第1群土器～第7群土器までの大別を行った。

山梨原第1群土器 縄文時代早期前半（燃糸文・押型文土器）

第2群土器 縄文時代早期後半（条痕文系土器）

第3群土器 縄文時代前期後葉（諸畿式土器）

第4群土器 縄文時代前期末葉（十三善提式土器）

第5群土器 縄文時代中期初頭（五頭ヶ台式土器）

第6群土器 縄文時代中期中葉（藤内1式土器）

第7群土器 縄文時代後期初頭（堀内1式土器）

各群の土器は、それぞれさらに形態、文様などにより細別を行い編年的位置付けを試みた。

第1群土器（第24図-1～3）

縄文時代早期前半に属する土器を本群とした。本遺跡からは、小破片が数片出土したのみであった。これらの内、1は縄文（R L）が施された斜縄文系土器の尖底部であり、2・3は前者が山形、後者が橢円の押型文土器である。

第2群土器（第21図、第24図-4）

縄文時代早期後半に属する土器を本群とした。第21図の上器は表裏条痕文施文の土器で、口唇部に刻みが入れられ、口唇直下には横位、胴上半から下半にかけては縱位に、それぞれ条痕文が施されている。この土器はC-10グリッド第VII層中から集中して出土した。4は半截竹管による条線、円形状刺突文が施された胴上半部で、ゆるやかな稜を有する。

第3群土器（第22図-1・2、第24・25図-5～37）

縄文時代前期諸磧式土器に比定されるものを本群とした。本群はまた、文様により4類に分類される。

第1類（第22図-1～2、第24・25図-5～29） 連続爪形状刺突文が施されたものである。

本類はまた、連続爪形状刺突文が山形状に施されたもの（a種）、木ノ葉状区画文を描くもの（b種）に細分される。a種には、第22図-1、第24図-5～7・9・12～23・29が属し、半截竹管による円形状刺突文の施文が認められる。b種には、第22図-2、第24図-10・11・13・28が属する。

第2類（第25図-30～34） 刻み入りの浮線文が施された土器群である。

第3類（第25図-35） 縄文のみのものである。

第4類（第25図-36・37） 集合条線が施されたもので、36はボタン状貼文が貼付されている。

これらの内、第1～3類は諸磧b式に、第4類は諸磧c式に、それぞれ比定される。

第4群土器（第25・26図-38～45）

縄文時代前期十三苦提式土器に比定されるものを本群とした。本群はまた、文様により2類に分類される。

第1類（第25図-38～40） やや幅の広い貼付文が施されたものである。貼付文にはヘラ状施文具によって刻みが入れられている。

第2類（第25・26図-41～45） 結節浮線文が施されたものである。

第5群土器（第26図-54・55）

縄文時代中期五領ヶ台式上器に比定されるもので、54は集合沈線文が、55は結節縄文が、それぞれ施されている。

第6群土器（第26図-46～53）

縄文時代中期藤内1式土器に比定されるもので、46～48は口唇部直下に刻み入りの隆帯が施され、50～53は、同じく細かい刻み入りの隆帯と、半截竹管による区画文および結節沈線文が施されている。

第7群土器（第22・23図-3～8、第26～28図-57～85）

縄文時代後期堀ノ内1式土器に比定されるもの本群とした。これらの内、第22・23図-3～7

第26~27図-57~71 4・6・7は口縁部片で、太い沈線と刻み入りの隆線(61・64~68)、太い沈線(59・62・63・70・74)、刻み入りの隆線(61)が、それぞれ口唇直下に施され、また、小突起が付けられたもの(第22~23図-4・6・7、第26図-58・59)が認められる。脚部は棒状施文具による沈線が施文され、沈線間に繩文(第27図-70)、刺突文(第28図-77)が施されたものも認められる。

以上、本地点出土の繩文式土器を7群に大別して概観した。本地点では繩文時代早期~同時代後期までの遺物が認められたが、各時期とも1~2型式程度の、断片的な出土であり、量的にも特にまとまりは認められなかった。

第2表 第1地点出土土器一覧表

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期 分類	出土地点	備考
1	底 部	繩文原体(R L)	繩文	少量の鐵錫を含有	茶褐色	1群	B-3第Ⅶ層	孔房状尖底
2	肩 部	棒状施文具	山形押型文	白色粒子を含有	茶褐色	A-2	第Ⅵ層	
3	"	"	横円押型文	雲母、白色粒子を含有	"	C-8	第Ⅶ層	
4	"	半截竹管、繩文原体(R L)	円形刺突文、条痕文、繩文	少量の白色粒子を含有	茶褐色	2群	B-2第Ⅶ層	
5	"	"	平行沈線文、連續爪形文、円形刺突文、繩文	少量の雲母を含有	茶褐色	3群	A-10不明	
6	口縁部	半截竹管	平行沈線文、連續爪形文	少量の雲母、石英を含有	"	"	B-9 碓群内	
7	"	"	"	少量の雲母、白色粒子を含有	茶褐色	"	A-9第Ⅶ層	
							A-9 碓群内	
							B-9 碓群内	
8	"	半截竹管、繩文原体(R L)	平行沈線文、連續爪形文、繩文	白色粒子を含有	茶褐色	"	A-5第Ⅶ層	補修孔を有する
9	肩 部	"	"	雲母、白色粒子を含有	"	"	B-9 碓群内	
10	"	"	"	少量の石英粒、白色粒子を含有	"	"	A-8第Ⅶ層	
11	"	"	"	雲母、石英粒を含有	"	"	A-9 碓群内	
12	"	半截竹管	平行沈線文、連續爪形文	少量の石英粒、雲母	茶褐色	"	B-9 碓群内	
13	"	"	"	少量の石英粒、赤褐色粒子を含有	"	"	A-9第Ⅶ層	
14	"	半截竹管、繩文原体(R L)	平行沈線文、連續爪形文、繩文	少量の石英粒、雲母を含有	茶褐色	"	B-9 碓群内	
15	"	半截竹管	平行沈線文、連續爪形文	少量の雲母、白色粒子を含有	茶褐色	"	B-9 碓群内	
16	"	半截竹管、繩文原体(R L)	平行沈線文、連續爪形文、繩文、繩文	少量の雲母を含有	"	"	4号土地覆土	
17	"	"	"	雲母、白色粒子を含有	暗茶褐色	"	A-6第Ⅶ層	
18	"	"	"	少量の白色粒子、雲母を含有	茶褐色	"	A-1第Ⅶ層	
19	"	"	"	少量の雲母、石英を含有	茶褐色	"	B-9第Ⅶ層	

No.	部 位	施 文 具	文 標 様	胎 土	色 調	時 期 分 類	出 土 地 点	備 考
20	刺 部	半截竹管, 繩文 原体(R L)	平行沈線文, 連続爪形 文, 繩文	少量の雲母, 白色粒子を含有	暗茶褐色	3群	4号土地覆土	
21	"	"	平行沈線文, 連続爪形 文, 円形刺突文, 繩文	少量の雲母を含有	タバコ色			
22	"	"	平行沈線文, 連続爪形 文, 繩文	少量の雲母, 石英, 黒褐色 粒, 白色粒子を含有	タバコ色	B-9	9号群内	
23	"	"	"	少量の白色粒子を含 有	茶褐色	A-6	第VII層	
24	口縁部	半截竹管	平行沈線文, 連続爪形文	多量の雲母を含有	暗茶褐色	A-5	第VI層	
25	"	半截竹管, 繩文 原体(R L)	平行沈線文, 連続爪形 文, 繩文	雲母, 石英粒を含有	茶褐色	B-9	9号群内	
26	"	半截竹管	平行沈線文, 連続爪形文	白色粒子を含有	暗茶褐色	A-7	第V層	口縁に小 突起を有 する
27	"	"	"	タバコ色	赤褐色	A-7	第V層	"
28	"	半截竹管, 繩文 原体(R L)	平行沈線文, 連続爪形 文, 繩文	"	茶褐色	A-9	配石内	
29	"	"	平行沈線文, 連続爪形 文, 円形刺突文, 繩文	雲母, 白色粒子を含 有	暗茶褐色	A-5	第VI層	
						A-5	第VII層	
						A-9	第VI層	
30	"	ヘラ状工具, 繩 文原体(R L)	有刻浮線文, 繩文	"	黒褐色	C-6	不明	
31	"	ヘラ状工具	有刻浮線文	白色粒子を含有	タバコ色	A-6	第VI層	
32	"	ヘラ状工具, 繩 文原体(R L)	有刻浮線文, 繩文	白色粒子を含有	茶褐色	A-6	第VI層	
33	"	"	"	雲母, 白色粒子を含 有	黒褐色	B-11	第VI層	
34	刺 部	"	"	タバコ色	茶褐色	2号住居址覆 土		
35	口縁部	繩文原体(R)	繩文	"	タバコ色	A-9	第VI層	口縁に小 突起を有 する
36	刺 部	半截竹管 付	集合沈線文, ボタン状點 付	雲母, 白色粒子を含 有	タバコ色	A-5	第VI層	
37	底 部	"	平行沈線文	白色粒子を含有	暗茶褐色	B-2	第VI層	器面内面 にカーボン 付着
38	洞 部	多截竹管	縫帶に刻み目	多量の雲母, 白色粒 子を含有	タバコ色	4群	B-1	第VI層
39	口縁部	半截竹管	"	雲母, 白色粒子を含 有	茶褐色	2号住居址覆 土		
40	"	"	"	タバコ色	暗茶褐色	A-1	第VI層	

No.	部位	施文具	文様	胎	土色	調色	時期分類	出土地点	備考
41	胴部	半截竹管	結節浮線文、三角陰刻	雲母、白色粒子を含有	茶褐色	4群	B-6第VII層		
42	口縁部	〃	隆帯に刻み目	雲母、多量の白色粒子を含有	暗茶褐色	〃	B-2第VII層		
43	胴部	〃	結節浮線文	雲母、白色粒子を含有	茶褐色	〃	A-2不明		
44	〃	〃	結節浮線文、平行沈線文	〃	黒褐色	〃	A-3第VII層		
45	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	A-3不明		
46	口縁部	〃	弦帶上に押し引き	白色粒子を含有	〃	6群	2号住居址覆土		
47	〃	〃	〃	〃	〃	〃	B-3第VII層		
48	〃	〃	〃	〃	〃	〃	B-4不明		
49	胴部	〃	〃	〃	〃	〃	D-6不明		
50	〃	多截竹管、繩文	弦帶上に押し引き、刺突	白色粒子、石英を含有	〃	〃	B-6第VII層		
	原体(R L)	文、繩文	有				C-6不明		
51	半截竹管	隆帯上に押し引き	〃	〃	〃	〃	B-6第V層		
52	〃	多截竹管、繩文	弦帶上に押し引き、繩文	〃	〃	〃	3号住居址覆土		
	原体(R L)								
53	〃	〃	〃	〃	〃	〃	C-6不明 3号住居址覆土上		
54	〃	半截竹管	平行沈線文	雲母、白色粒子を含有	黒褐色	5群	B-1第VII層		
55	〃	結節圓文(R L)	繩文	〃	茶褐色	〃	A-10第V層		
56	〃	半截竹管	平行沈線文	白色粒子を含有	暗茶褐色	7群	A-1第V層		
57	口縁部	棒状施文具	沈線文、隆帯に刻み目	〃	米褐色	〃	B-1第V層		
58	〃	〃	沈線文、隆帯に刺突	〃	黒褐色	〃	B-5第IV層		
59	〃	〃	沈線文	雲母、白色粒子を含有	〃	〃	小穴群P 3覆土		
60	〃	〃	沈線文、隆帯に刻み目	白色粒子を含有	暗茶褐色	〃	B-5第V層		
61	〃	〃	沈線文、刺突文	〃	茶褐色	〃	B-1第V層		
62	〃	〃	〃	〃	〃	〃	B-3第V層		
63	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	A-10不明		
64	〃	〃	〃	雲母、白色粒子を含有	〃	〃	A-1第VII層		
65	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	B-5第V層		
66	〃	〃	沈線文、刺突文、隆帯に刻み目	〃	〃	〃	A-3不明		
67	〃	〃	沈線文、刺突文	白色粒子を含有	〃	〃	B-1第V層		
68	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	B-3第V層		
69	〃	〃	沈線文、刺突文、口唇に刻み目	雲母、白色粒子を含有	黒褐色	〃	B-12不明		
70	〃	棒状施文具、繩文	沈線文、刺突文、繩文	雲母、石英粒、白色粒子を含有	〃	〃	B-1第V層		
	原体(R L)								

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期分類	出土地点	備考
71	口縁部	棒状施文具	沈線文、刺突文	白色粒子を含有	茶褐色	7群	A-3第V層	
72	胴部	"	沈線文	"	"	B-1第V層		
73	頭部	"	沈線文、刺突文	石英粒、白色粒子を含有	"	"	B-1第V層	
74	口縁部	"	"	雲母、白色粒子を含有	暗茶褐色	"	B-2第V層	
75	胴部	"	沈線文	"	茶褐色	"	B-2第V層	
76	"	"	沈線文、縦帯に刻み目	"	"	不明第V層		
77	"	竹管	沈線文、刺突文	雲母、石英粒、白色粒子を含有	暗茶褐色	"	A-1第V層	
78	"	棒状施文具	沈線文	白色粒子を含有	"	"	B-1第V層	
79	"	"	"	雲母、白色粒子を含有	茶褐色	"	B-9第V層	
80	"	"	"	雲母、石英粒、白色粒子を含有	暗茶褐色	"	A-2第V層	
81	"	"	"	雲母、白色粒子を含有	"	"	B-2第V層	
82	"	"	"	"	茶褐色	"	B-1第V層	
83	"	棒状施文具、縄文原体(LR)	"	"	暗茶褐色	"	B-5第V層	
84	"	棒状施文具	沈線文、刺突文	白色粒子を含有	茶褐色	"	A-3第V層	
85	口縁部竹管		内面に沈線文、刺突文、縦帯文	"	暗茶褐色	"	B-1第V層	

(2) 土製品

土器片鍤 (1)

小形なもので、側縁を磨って整形しており、左右には切目が施される。縄文時代後期掘ノ内式の土器片を利用している。

土製円盤 (2~4)

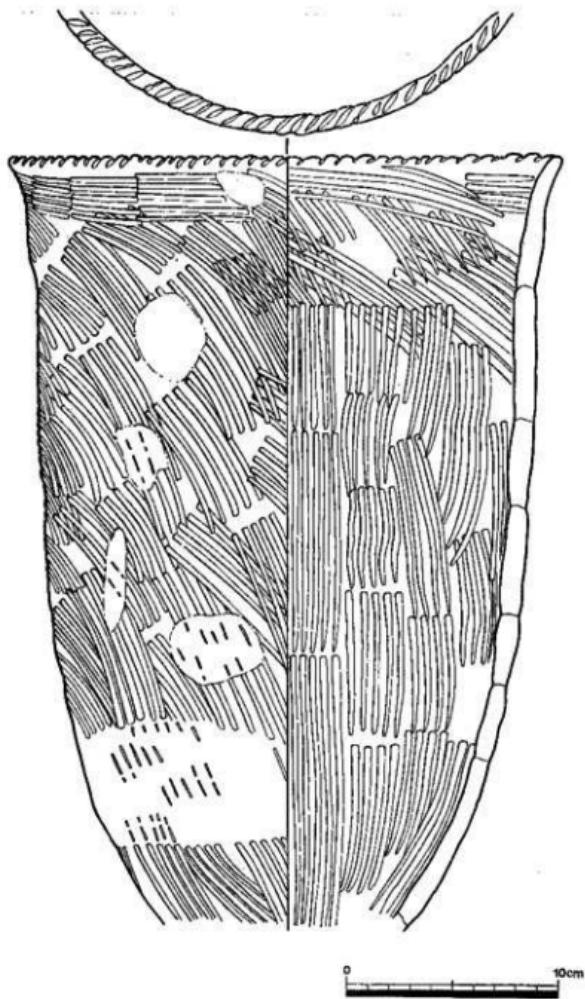
いずれも土器片の側縁を磨って整形したもので、2は不整形、3は円形、4は三角形を呈する。利用している土器片は、縄文時代後期掘ノ内式のものと思われる。出土状況からは使用方法を窺わせる情報は得られなかった。

人形 (5・6)

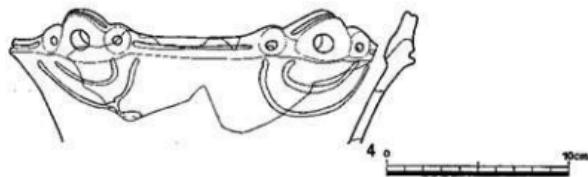
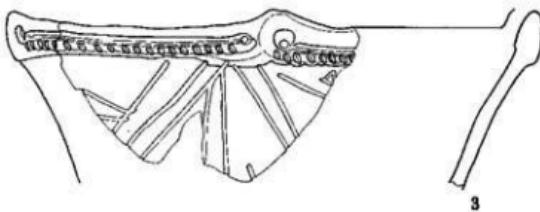
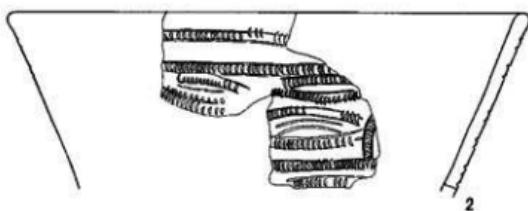
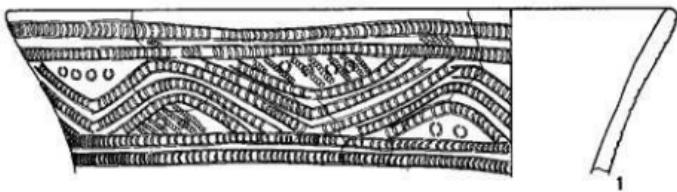
5・6とも素焼きの製品である。5は鳥を模したものと思われる。6は型作りで、合わせ目が明瞭に残る。塔を模したのだろう。底面中央には孔が穿たれている。5・6とも江戸時代以降の所産であろう。

第3表 山梨原第1地点上製品一覧表

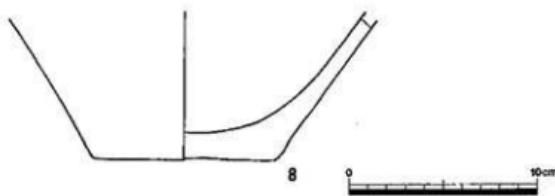
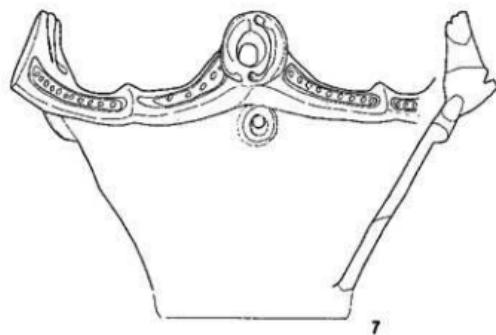
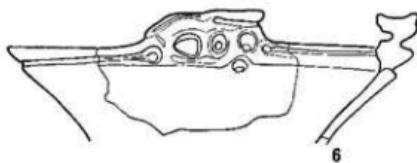
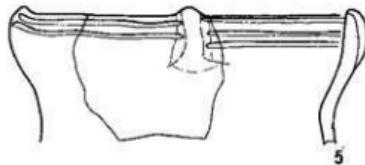
番号	種別	規格(mm)	色調	胎土	出土地点	備考
1	土器片鍤	長軸35×短軸18	茶褐色	白色・黑色粒子	B-2 第V層	沈線文(5条)
2	土製円盤	" 41× " 33	黒褐色	白色粒子	11号土塗器上	縄文(LR)
3	"	" 33× " 33	茶褐色	"	B-2 第V層	沈線文(1条)
4	"	" 53× " 48	黄褐色	"	B-4 第V層	
5	玩具	—	"	—	A-10 第II層	頭部の一部欠損
6	"	—	灰褐色	—	表採	



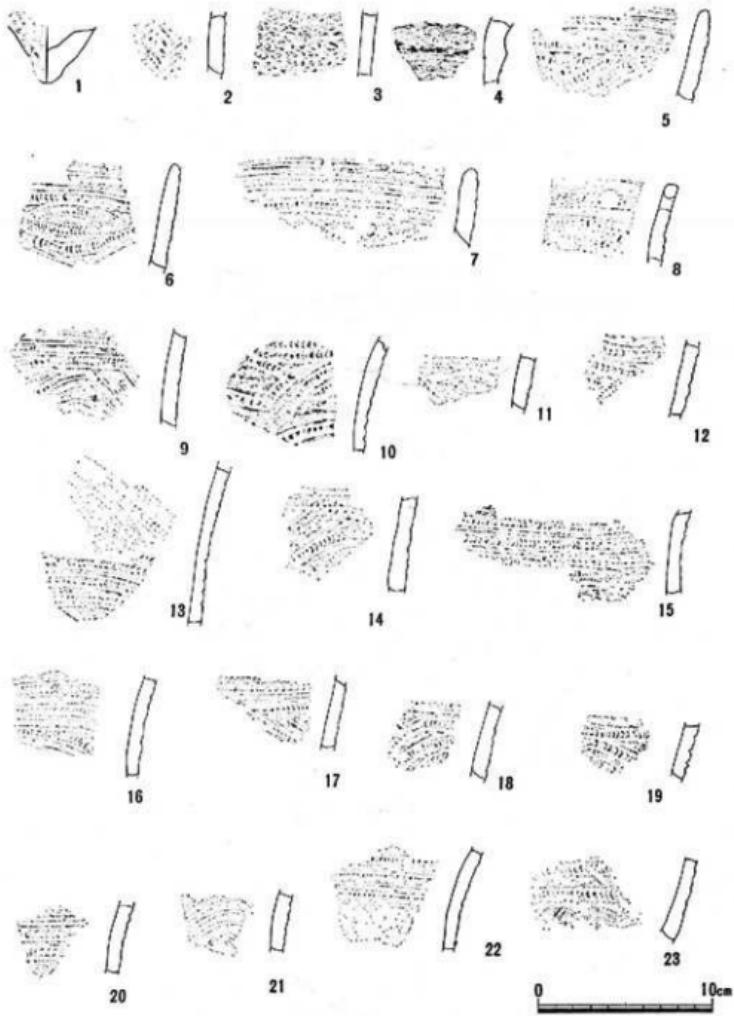
第21図 第1地点出土の七器火陶図(1)



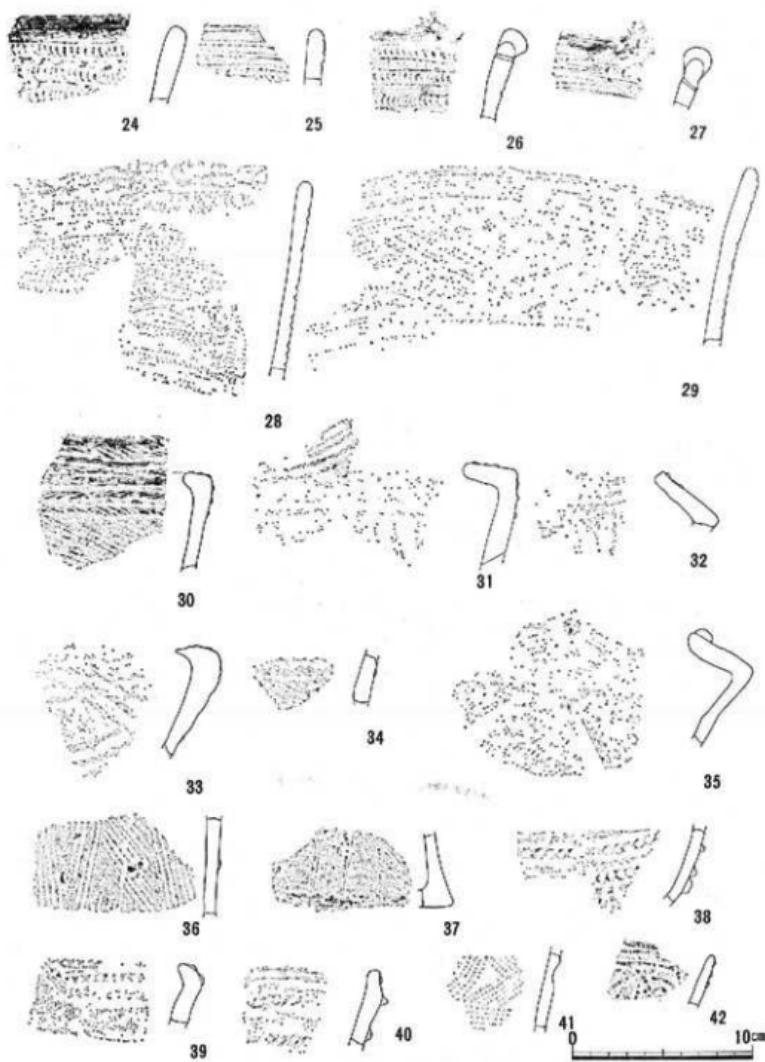
第22図 第1地点出土の土器実測図(2)



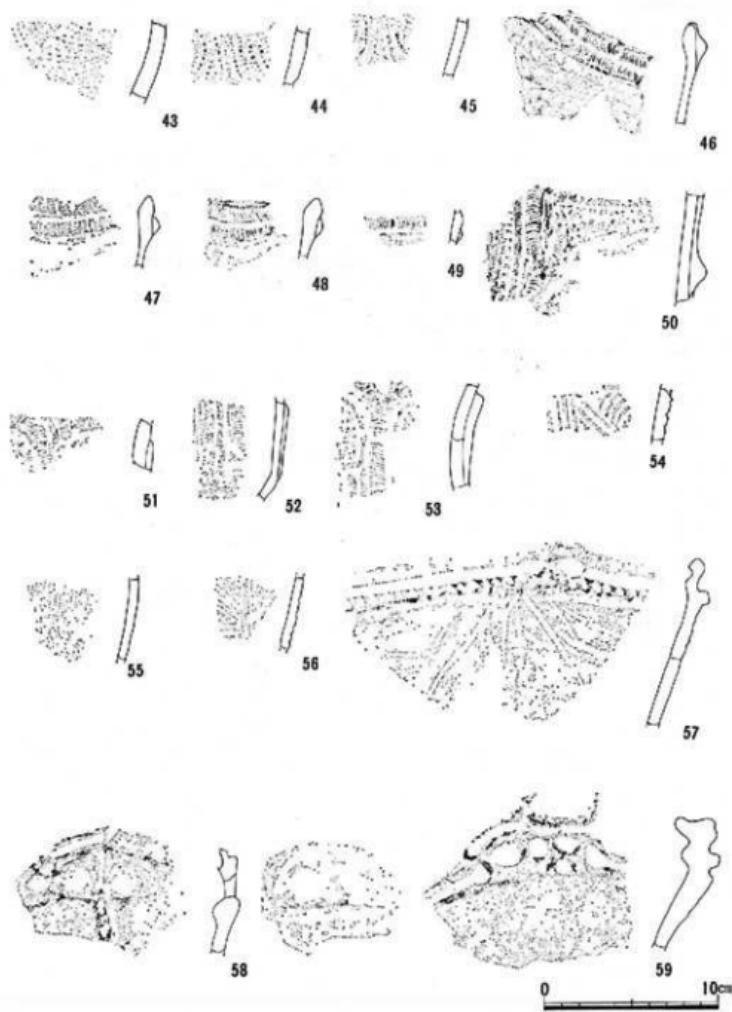
第23図 第1地点出土の土器実測図(3)



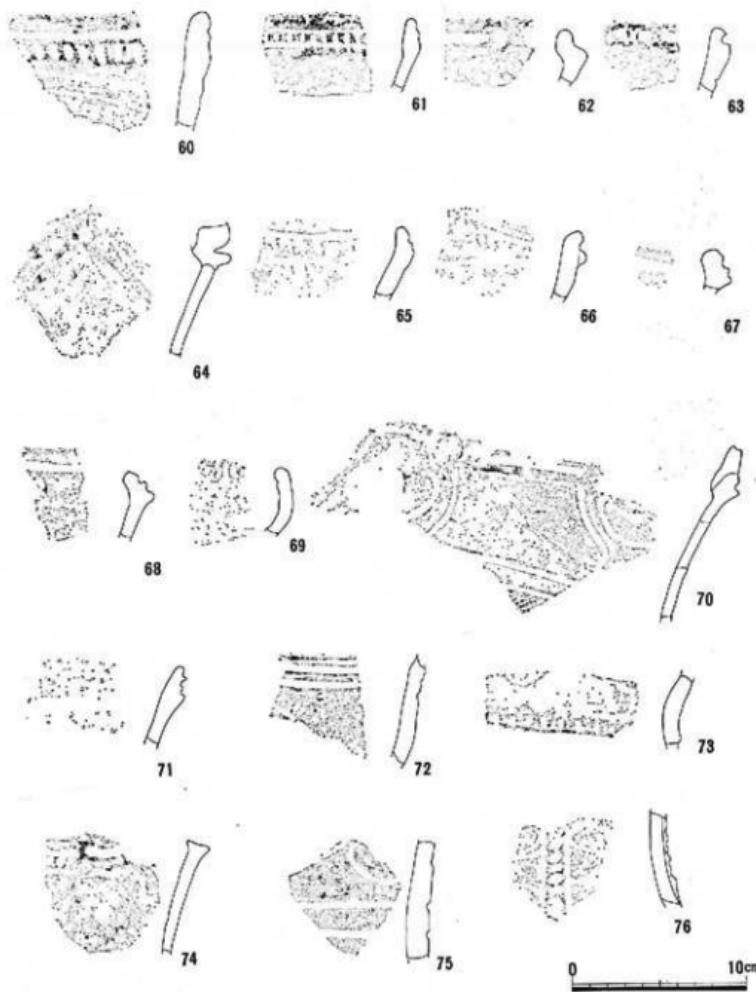
第24図 第1地点出土の土器拓影図(1)



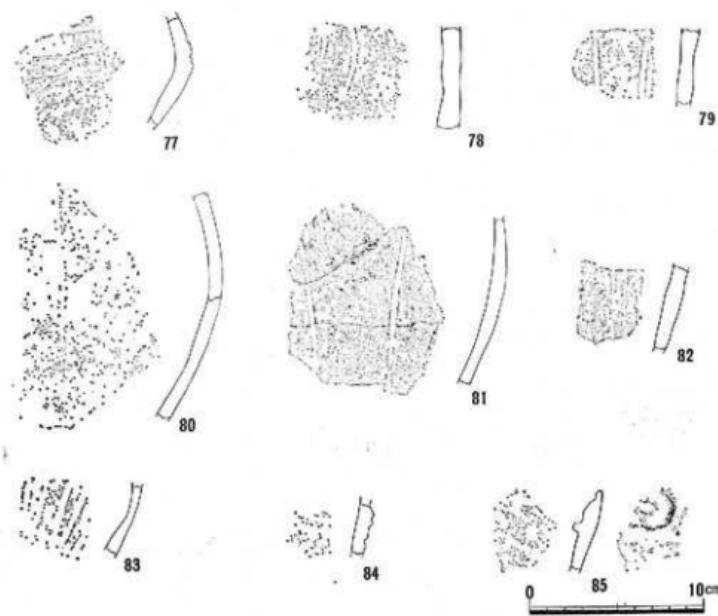
第25図 第1地点出土の土質断面図(2)



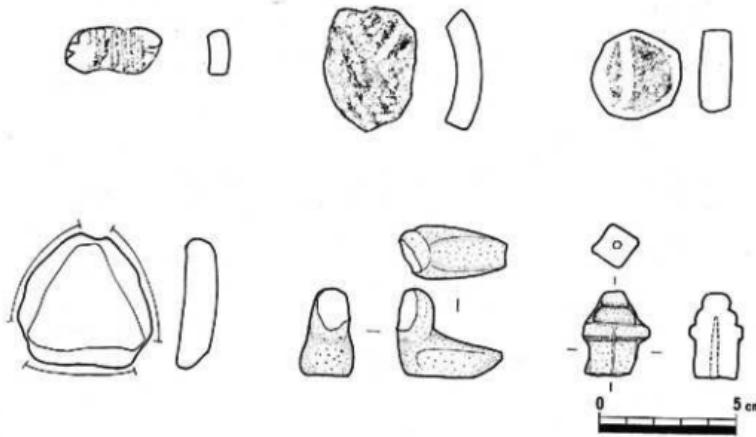
第26図 第1地点出土の土器拓影図(3)



第27図 第1地点出土の土器拓影図(4)



第28図 第1地点出土の土器拓影図(5)



第29図 第1地点出土の土製品実測図

(3) 石器類

石鎌 (1~5)

5点出土した。石材は1のみがチャートで、他は全て黒曜石である。基部形態を観察すると抉りを有するもの(1~4)、抉りの無いもの(5)がある。

1は長身で、抉りは深い。調整剝離はこまかく丁寧な形の抉りである。2は先端部を欠損している。抉りは深く、側縁は弧状を呈する。3はU字状の深い抉りがあり、大きな脚部を作り出している。4は表裏に大きな剝離を残し、こまかに調整は見られない。抉りは浅く、側縁も凹凸で粗雑な製品である。5は他のものに比べて大形な製品である。全体の剝離は大まかで、厚味がある。

石匙 (6)

黒曜石製である。器面は調整されず、粗雑な作りである。つまみ部・刃部は簡単に片面より調整剝離がなされる。刃部は刃こぼれにより凹凸である。

装身具 (7)

本調査に先立って試掘調査を行った際に出土したもので、全体の刃を欠損しており、中央に貫通孔が穿たれている。

スクレイパー (8)

チャート製である。偏平の剝片を用いたもので、下端部に両側から剝離を加え弧状を呈する刃部を作り出している。

打製石斧 (9~11)

3点出土した。いずれも完形品。1・2は粘板岩、3は砂岩を使用。形態は短円形を呈する。

9は側縁を表裏から丁寧に調整している。かなり使い込まれており、刃部は丸味を帯びて磨耗痕を明瞭に観察することができる。10は偏平な粗大剝片に大ざっぱな剝離を加えた後、片面から簡単に調整を加えている。刃部は表裏から剝離を加えて作り出している。11は粗い剝離を加えただけで、特別な調整はみられない粗雑な製品である。刃部表面に磨耗痕が観察される。

粗大石器 (12~15)

粗大な剝片及び石核を用いた石器を一括した。刃部は特別な調整は見られず、12~14は自然面を残している。12~15とも使用痕を明瞭に観察することができる。

横刃形石器 (16・17)

2点出土した。16・17とも粗雑な剝離を加え台形状に整えており、自然面を残している。刃部は直線的で、片方からの剝離により作り出されている。16は硬質砂岩、17は凝灰岩質砂岩である。

磨石 (18~23)

18~21は完形品で、23は欠損品である。22は欠損した礫片を使用したものと思われる。18は上面と側面も磨られており、原形を留めず、方形状を呈する端整な形である。使用されてこの様な形になったものか、使用目的のためにこの様な形に整えたのかは判断しかねる。19~21・23は上・下面とも磨かれて、滑らかである。22は上面と側面の一部を磨っている。

蔽石 (24・25)

24・25とも側縁に打痕を明瞭に観察することができる。両方とも上・下面が磨られており、磨石としても機能したことが察せられる。

凹 石 (26·27)

26は欠損品である。上面のみ浅い凹を有する。上・下面とも磨られて、磨石としても機能したことが察せられる。27は空形品だが、火熱を受け、全面にヒビを生じ、上・下面に凹を有する。

その他、多数の剝片類が出土した。層位的には第VII層中の出土が多く、平面的にはA・B-5～7グリッド付近に集中する傾向が看取された。図示した石器類の出土位置も同様な傾向を示し、第VII層中A・B-5～7グリッド付近に石材加工の行為が行なわれ痕跡を示すと推察される。

出土した石器類の所属時期であるが、図示した全部について明確にすることは困難であり、出土状況などの調査データから窺い知れたものは極少数であった。

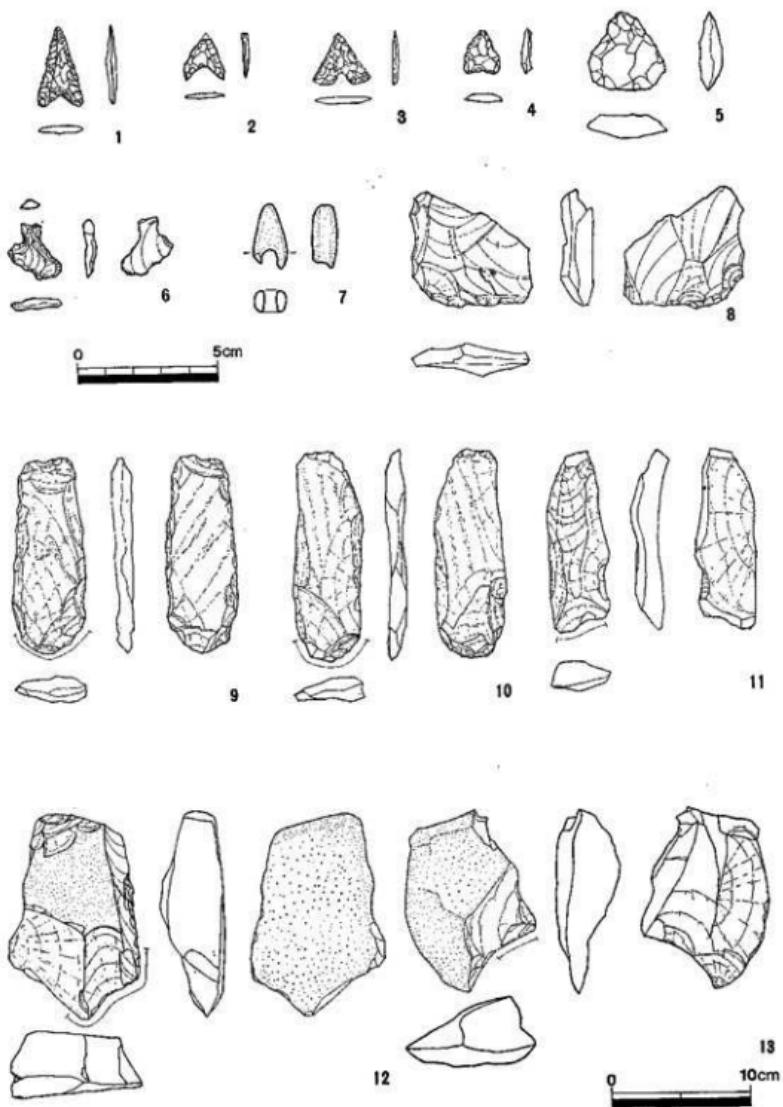
石鏃3については、その形態が縄文時代早期中葉の石鏃と同じ特徴を備えており、出土層位（第V層）からは第1群土器が含まれていることからそれを傍証するものであろう。石鏃4は4号土塙の覆上から出土したもので、土塙の埋没が縄文時代前期を下らないことから、その下限を縄文時代前期にもってくることができよう。打製石斧9・10は、第VII層中の縄群から出土しており、同じ縄群からは第3群土器が純粹に検出されていることから、同じ年代が与えられよう。打製石斧11は、横刃形石器16・磨石21・蔽石25とともに2号土塙から出土している。土塙構築時期が縄文時代前期に求められるため、出土した4点の石器は土塙構築時期と同じ時期に帰属できるものと思われる。

他の石器類の時期は、出土層位が参考となろうが、年代比定の積極的な情報は発掘時の所見からは得られなかった。

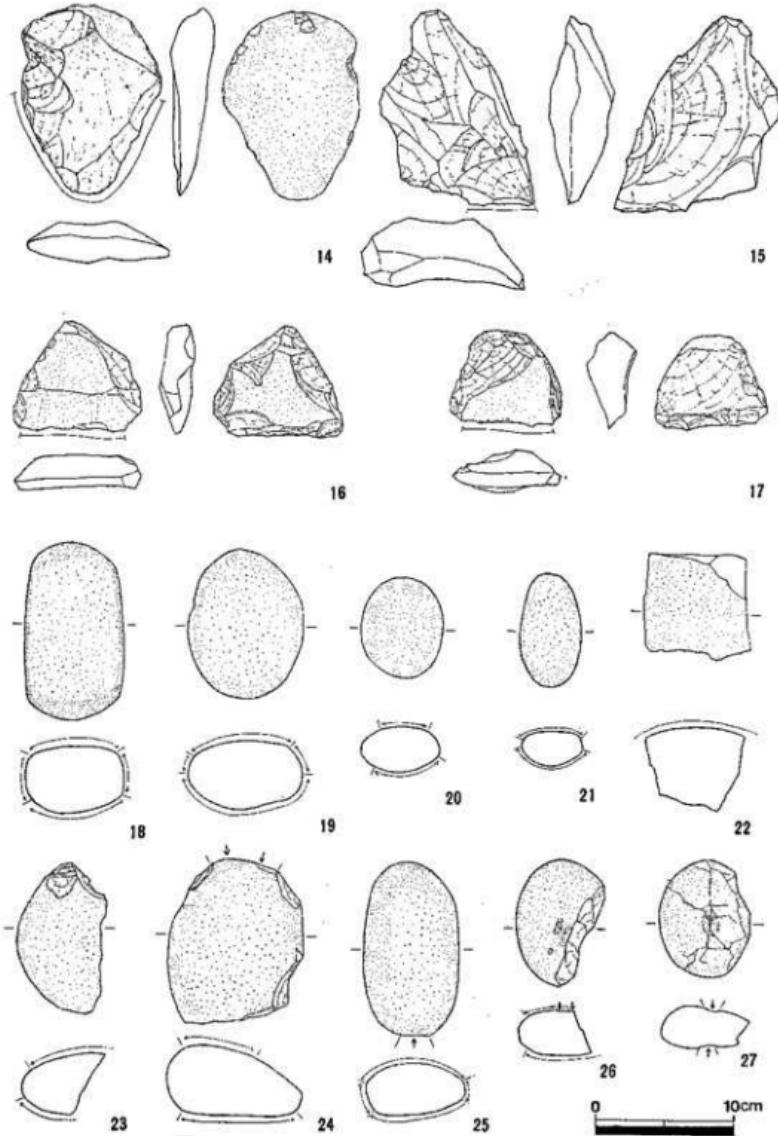
第3表 出土石器二覽表

(無位 番)

種別	石	材	最大長	最大幅	最大厚	重	量	出	土	位	置	備考
			(g)									
1 石 2 ハ 3 ハ 4 ハ 5 ハ	鐵 チ 温 タル タタ	一 ト 石 岩 板	27.5 16 15 17 16	16 2.5 2.5 1.4 3	3 1 1 1 5	1 1 1 1 1	B-4 B-2~4 B-5 号 4	B-4 B-2 B-5 号 土	V層 下層 V層 V層 V層	第V層 第VI層 第VII層 第VIII層 第IX層	先端欠損	
6 石 7 裝 8 装 9 打 10	身 ス レ イ 打 装 一 斧 石 板	匙 鉢 蛇 チ 粘 ガ 一 板	21 48 38 140 150	15 15 12 51 47	4 3 20 177.5 15	1 1 20 15 15	B-2 試 A-10 B-9 B-8	B-2 試 A-10 B-9 B-8	V層 V層 V層 V層 V層	第V層 第VI層 第VII層 第VIII層 第IX層	全体の約欠損	
11 粗 12 粗 13 粗 14 粗 15	大 大 大 大 大	石 器 硬 質 砂 岩 ホル 硬 質 砂 岩 山	127 144 100 136 127	43 93 127 100 102	21 46 48 28 45	115 690 400 330 565	2 B-9 B-4 A-5 C-10	2 B-9 B-4 A-5 C-10	号 V層 V層 V層 V層	土 地 第V層 第VI層 第VII層	地盤	
16 横 17 膜 18 膜 19 膜 20	刃 不 硬 明 形 膜 硬 質 砂 岩 花	形 膜 硬 質 砂 岩 山 山 安 石	66 77 128 107 72	80 93 71 81 57	62 23 47 50 33	170 182.5 748 573 213.5	B-6 2 A-4 A-2 A-5	B-6 2 A-4 A-2 A-5	第IV層 V層 V層 V層 V層	第IV層 V層 V層 V層 V層	地盤	
21 22 23 24 25	安 安 安 蔽 蔽	玄 玄 玄 花 花	81 75 110 116 125	44 73 61 98 72	25 58 42 50 37	100.3 510 300 108.9 469	2 C-8 C-9 C-10 2	2 C-8 C-9 C-10 2	号 V層 V層 V層 上	土 不 第V層 第VI層 第VII層 上	地盤	
26 27	凹 凹	石 石	92 85	60 66	32 31	275 240	C-6 C-6	C-6 C-6	第V層 第VI層	第V層 第VI層	全体の約を欠損 とビを生じている	



第30図 第1地点出土の石器実測図(1)



第31図 第1地点川土の石器実測図（2）

第2節 第2地点の概要と成果

1 概 要

第2地点は、第1地点の西側に位置する。本地点の土層は第I層から第VII層に分かれる。

第I層（表土）

第II層（耕作上） 第II層はII a層、II b層、II c層に細分される。II a層は耕作上である。II b層は水田耕作時におけるマサ（鋤き床）の面である。II c層は茶褐色土で、粘性が強く、赤褐色粒子を含有する。

第III層（黒褐色上） 粘性はやや強く、黄褐色粒子を多量に含有する。

第IV層（黄褐色上） 第IV層は更にIV a層、IV b層に細分される。IV a層は黄褐色粒子を多量に含有する。IV b層は3~5mm大の赤褐色、黄褐色、灰色スコリアを含有する。

第V層（暗褐色十） 標準土層に準ずる。

第VI層（暗茶褐色土） 標準土層に準ずる。

第VII層（褐色土） 第VII層は更にVII a層、VII b層に細分される。VII a層は粘性が弱く、灰色スコリアを含有する。VII b層は砾を含有し、ロームブロックが混入する。

第VIII層（茶褐色土） スコリア及び砾を含有し、ロームブロックが混入する。

本地点から検出された遺構は、平安時代の土塙4基、中世以降と思われる溝状造構11基、土塙4基である。出土遺物は、包含層より、繩文土器、土師器などが得られたが、いずれも細片で出土量も貧弱であった。

2 遺 構

(1) 土 塙

1号土塙（第33図）

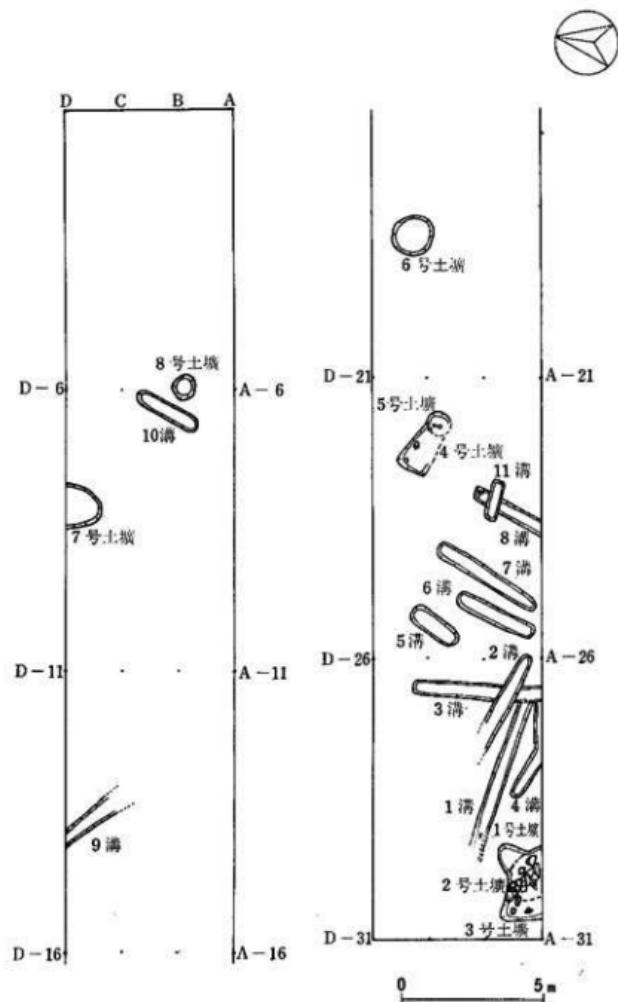
A-30グリッドに位置する。第III層上面より構築されている。東壁は2号土塙によって切られ、南壁は調査区域外であるため、全容は不明であるが、形状は不整形を呈し、底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸190+α×短軸108+αcm、深さは確認面より-25cmを測る。覆土は茶褐色土で、覆土中及び底面に溶岩礫が散在している。出土遺物なし。

2号土塙（第33図）

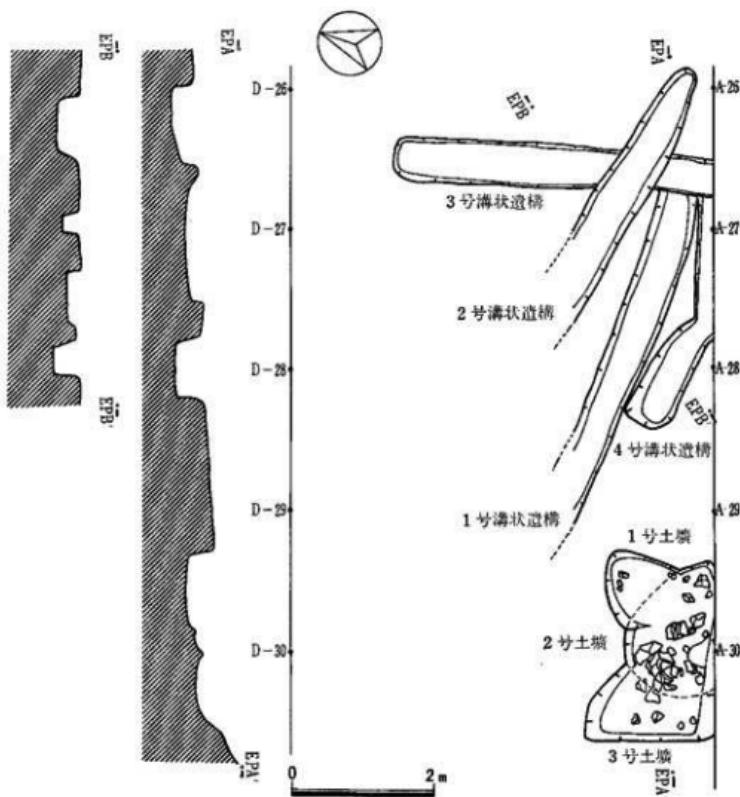
A-29・30グリッドに位置する。第III層上面より、東壁は3号土塙を、西壁は1号土塙をそれぞれ切り構築されている。南壁は調査区域外であるため、全容は不明であるが、形状は不整形圓形を呈している。規模は長軸190×短軸130+αcm、深さは確認面より-40cmを測る。覆土は茶褐色土で、覆土中及び底面に溶岩礫が散在している。出土遺物なし。

3号土塙（第33図）

A-29・30グリッドに位置する。第III層上面より構築されている。南壁は2号土塙によって切られているため、全容は不明であるが、形状は不整形を呈し、底面は平坦であり、壁は垂直に立ち上がる。規模は長軸190×短軸130+αcm、深さは確認面より-30cmを測る。覆土は茶褐色土で、覆土中及び底面に溶岩礫が散在している。出土遺物なし。



第32図 山梨原道路第2地点全体図



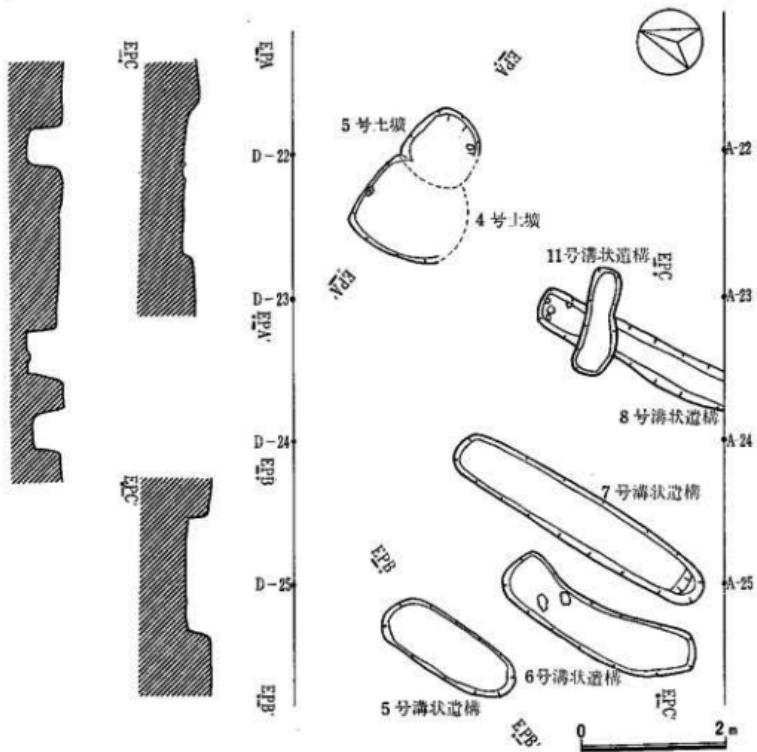
第33図 1～3号土塙、1～4号溝状造構平面図

4号土塙（第34図）

B-22, C-22グリッドに位置する。第IV層上面より構築されている。東壁は5号土塙によって切られているため、全容は不明であるが、形状は不整方形を呈し、底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸150×短軸114+αcm、深さは確認面より-15cmを測る。覆土は黒褐色土で、底面に溶岩礫が若干散在している。出土遺物なし。

5号土塙（第34図）

B-22・23, C-22・23グリッドに位置する。第IV層上面より、西壁は4号土塙を切り構築されている。形状は不整円形を呈し、底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸100×短軸90cm、深さは確認面より-20cmを測る。覆土は黒褐色土で、底面に溶岩礫が若干散在している。出土遺物なし。



第34図 4・5号土塙、5～8・11号溝状造構平面図

6号土塙（第35図）

B-18, C-18グリッドに位置する。第IV層上面より構築されている。形状は円形を呈し、底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸115×短軸150cm、深さは確認面より-15cmを測る。覆土は黒褐色土。出土遺物なし。

7号土塙（第36図）

C-7・8グリッドに位置する。第IV層上面より構築されている。北壁は調査区域外のため、全容は不明であるが、形状は不整形を呈し、底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸160×短軸140± α cm、深さは確認面より-14cmを測る。覆土は黒褐色土。出土遺物なし。

8号土塙（第36図）

A-5グリッドに位置する。第III層七面より構築されている。形状は円形を呈し、底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸82×短軸80cm、深さは確認面より-30cmを測る。覆土は黒褐色土で、底面に溶岩礫が散在している。出土遺物なし。

(2) 溝状遺構

1号溝状遺構 (第33図)

A-27・28グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は、東側が3号溝状遺構によって切られているため、全容は不明であるが、長さ490×幅60cm、深さは確認面より-25cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

2号溝状遺構 (第33図)

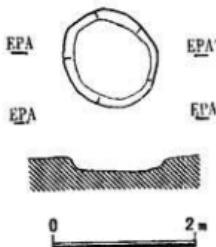
A-26・27グリッドに位置する。第III層上面より構築され、3号溝状遺構を切っており、主軸東西方向である。規模は長さ380×幅70cm、深さは確認面より-25cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

3号溝状遺構 (第33図)

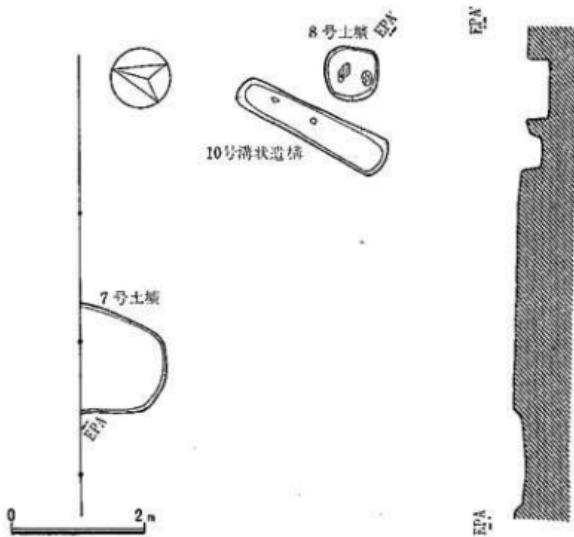
A-26、C-27グリッドに位置する。第III層上面より、1号溝状遺構を切って構築されており、主軸は南北方向である。規模は、南側が2号溝状遺構によって切られ、更に調査区域外であるため、全容は不明であるが、長さ454+α×幅60cm、深さは確認面より-40cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

4号溝状遺構 (第33図)

B-25、C-25グリッドに位置する。第III層上面より構築され、主軸は南北方向である。規模は、長さ200×幅80cm、深さは確認面より-30cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。



第35図 6号土塙平面図



第36図 7・8号土塙、10号溝状遺構平面図

5号溝状遺構（第34図）

A-27・28グリッドに位置する。第III層上面より構築され、主軸は東西方向である。規模は、南側が3号溝状遺構によって切られ、更に調査区域外であるため、全容は不明であるが、長さ $344 + \alpha \times 幅70\text{cm}$ 、深さは確認面より-35cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

6号溝状遺構（第34図）

A-26、B-25・26グリッドに位置する。第III層上面より構築され、主軸は南北方向である。規模は、長さ $290 \times 幅70\text{cm}$ 、深さは確認面より-35cmを測る。底面に溶岩礫が若干散在している。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

7号溝状遺構（第34図）

A-24、B-24グリッドに位置する。第III層上面より構築され、主軸は南北方向である。規模は、長さ $396 \times 幅80\text{cm}$ 、深さは確認面より-40cmを測る。南端の壁は階段状になっている。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

8号溝状遺構（第34図）

A-23、B-23グリッドに位置する。第III層上面より構築され、主軸は南北方向である。規模は、北側が11号溝状遺構によって切られ、南側が調査区域外であるため、全容は不明であるが、長さ $290 + \alpha \times 幅60\text{cm}$ 、深さは確認面より-5cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

9号溝状遺構（第37図）

D-13・14グリッドに位置する。第III層上面より構築され、主軸は東西方向である。規模は、北側が調査区域外であるため、全容は不明であるが、長さ $215 + \alpha \times 幅80\text{cm}$ 、深さは確認面より-20cmを測る。壁はゆるやかに立ち上っている。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

10号溝状遺構（第36図）

A-6、B-7グリッドに位置する。第III層上面より構築され、主軸は南北方向である。規模は、長さ $250 \times 幅60\text{cm}$ 、深さは確認面より-28cmを測る。底面に溶岩礫が若干散在している。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

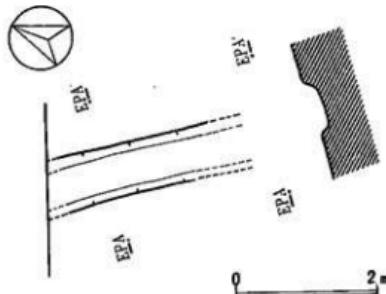
11号溝状遺構（第34図）

A-22・23グリッドに位置する。第III層上面より、8号溝状遺構を切って構築されており、主軸は東西方向である。規模は、長さ $150 \times 幅50\text{cm}$ 、深さは確認面より-15cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

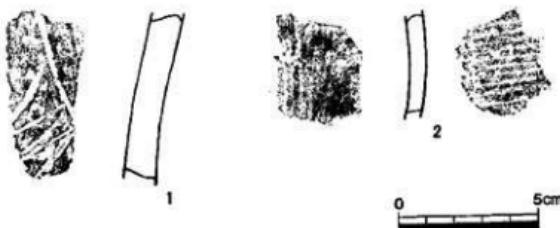
3 出土遺物

縄文土器

1は棒状施文具による沈線文が施されている。胎土には白色粒子を含有し、緻密さを欠く。焼成は良好。色調は茶褐色を呈する。



第37図 9号溝状遺構平面図



第38図 山梨原遺跡第2地点出土遺物

土器器

2は変形上唇の脣部破片で、刷毛目が外面は縦位、内面は横位に施されている。胎土は精選されておらず不純物を含むが、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

第3節 第3地点の概要と成果

1 概 要

第3地点は、第1地点の西側に位置する。本地点の層序は、基本的に5層に区分される。

第I層（表土）

第II層（耕作土） 第II層は更にII a層、II b層、II c層に細分される。II a層は耕作土である。II b層は水田耕作時におけるマサ（鋤き床）の面である。II c層は茶褐色土で、粘性が強く、赤褐色粒子を含有する。

第III層（黒褐色土） 第III層は部分的に、標準土層第III層よりやや明るい色調で黄褐色粒子をより多く含有する部分を持つ、これをIII'層とする。

第IV層（黄褐色土） 第IV層は更にIV a層、IV b層に細分される。IV a層は黄褐色粒子を多量に含有し、部分的に粘性の非常に強いブロックを有する。IV b層は3~5mm大の赤褐色、黄褐色、灰色スコリアを含有し、部分的にスコリアブロックを有する。

第V層（暗褐色土） 標準土層に準ずる。

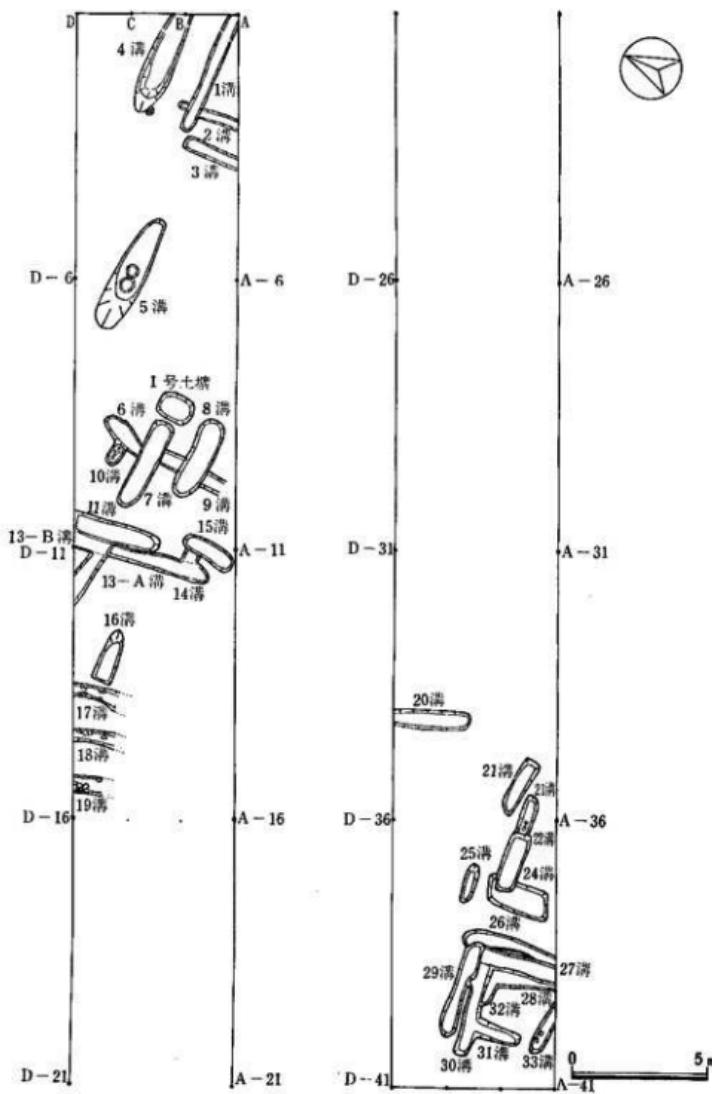
本地点から検出された遺構は、平安時代の土塙1基、中世以降と思われる溝状遺構33基である。出土遺物は、出土量が貧弱であり、包含層より縄文土器・須恵器が少量得られた。

2 遺 構

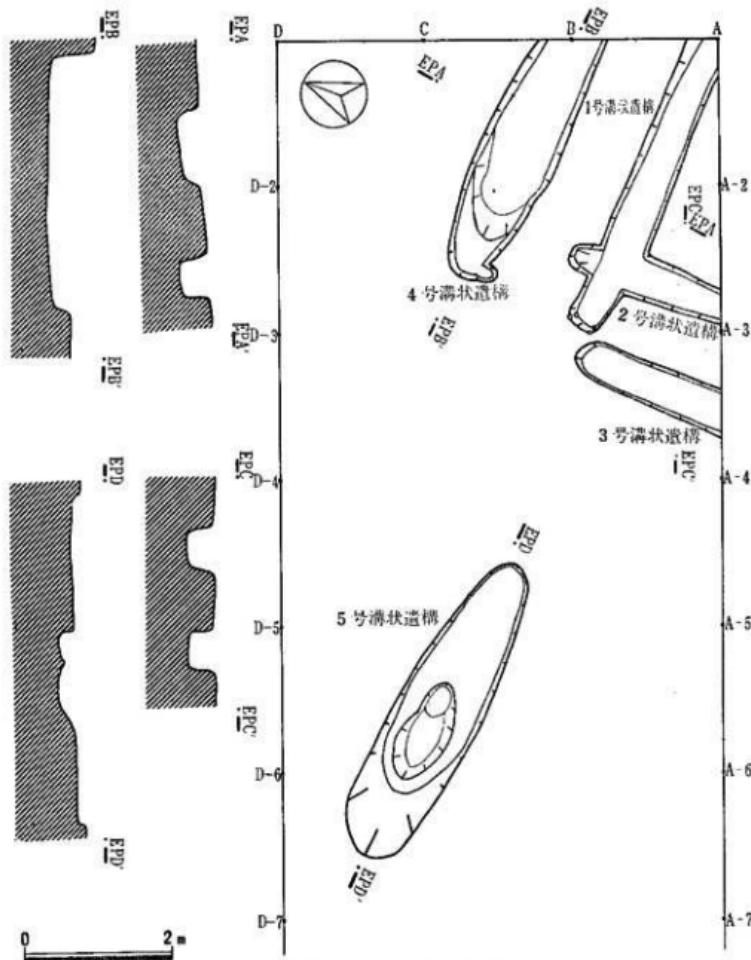
(1) 土 塙

1号土塙（第41図）

A・B-8グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、形状は不整方形を呈し、壁



第39図 山梨原遺跡第3地点全体図



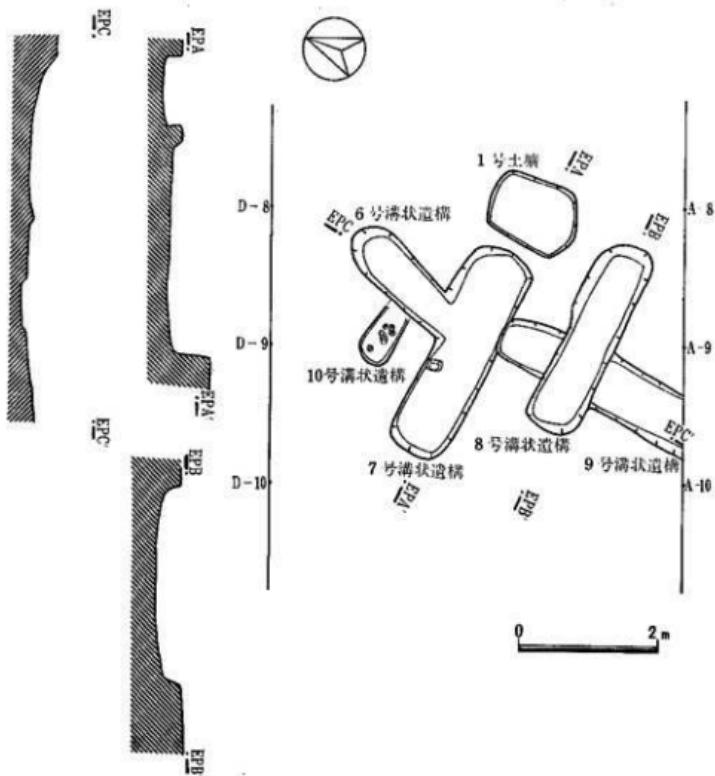
第40図 1～5号溝状遺構平面図

は垂直に立ち上がる。規模は長軸140×短軸90cm、深さは確認面より-25cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

(2) 溝状遺構

1号溝状遺構（第40図）

A-1・2グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は東側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ440+α×幅60cm、深さは確認面より-40cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。



第41図 6～10号溝状遺構、1号土塙平面図

2号溝状遺構（第40図）

A-2グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は南側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ $220 + \alpha$ ×幅60cm、深さは確認面より-35cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

3号溝状遺構（第40図）

A-3グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は南側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ $120 + \alpha$ ×幅55cm、深さは確認面より-35cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

4号溝状遺構（第40図）

B-1・2グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は東側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ $370 + \alpha$ ×幅100cm、深さは確認面より

-30cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は茶褐色土。底面付近より繩文上器片1点（前期諸磯b式）が出土した。

5号溝状遺構（第40図）

B-4~6, C-5・6グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は、長さ450×幅120cm、深さは確認面より-10cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、溝中央部に50×30cm、深さ底面より-20cmのピットと90×70cm、深さ底面より-20cmのピットを連接して有する。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

6号溝状遺構（第41図）

B-8, C-8グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は、長さ250×幅70cm、深さは確認面より-40cmを測り、7号溝状遺構の中央部を切り構築される。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は茶褐色土で、底面付近に溶岩礫が散在している。出土遺物なし。

7号溝状遺構（第41図）

B-8・9グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は長さ320×幅90cm、深さは確認面より-60cmを測り、6号溝状遺構に中央部を切られる。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は茶褐色土出土。遺物なし。

8号溝状遺構（第41図）

A-8・9グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は長さ290×幅70cm、深さは確認面より-30cmを測り、9号溝状遺構に中央部を切られる。壁はなだらかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は茶褐色土出土。遺物なし。

9号溝状遺構（第41図）

A-9・B-9グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は南北側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ300+ α ×幅90cm、深さは確認面より-40cmを測り、8号溝状遺構に切られる。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

10号溝状遺構（第41図）

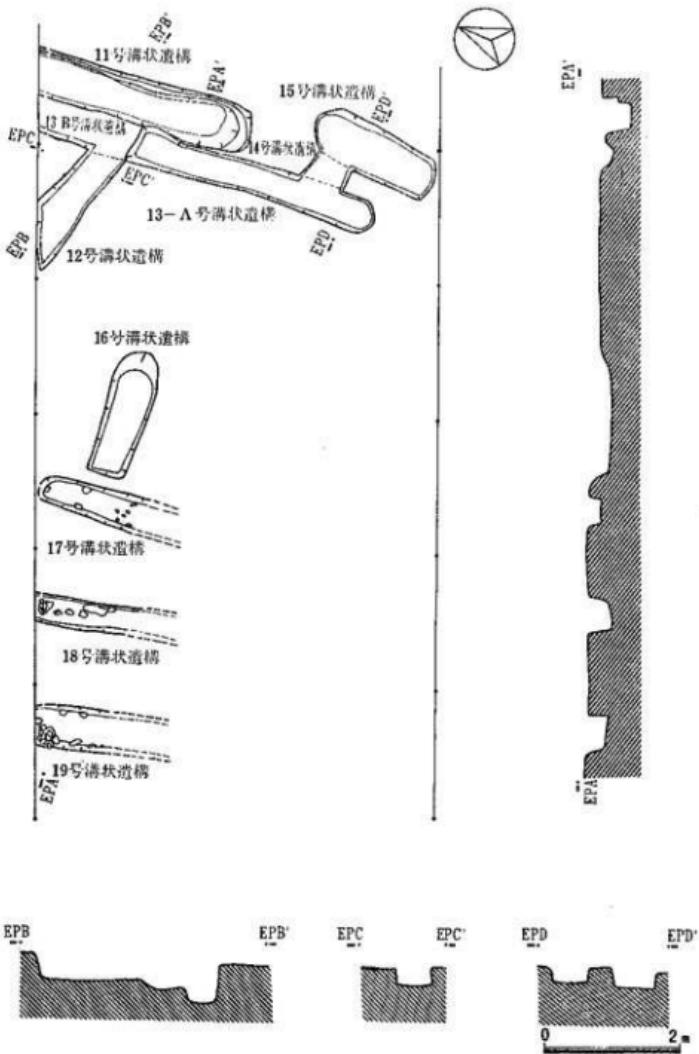
C-9グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は長さ90+ α ×幅50cm、深さは確認面より-10cmを測り、東側を6号溝状遺構に切られる。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸がある。覆土は茶褐色土で、底面に火山礫が散在する。出土遺物なし。

11号溝状遺構（第42図）

B・C-10グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は北側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ320+ α ×幅70cm、深さは確認面より-60cmを測り、12号溝状遺構の東側を切り構築される。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

12号溝状遺構（第42図）

C-11グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は西側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ175+ α ×幅70cm、深さは確認面より-40cmを測り、11・13号溝状遺構に東側を切られる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。



第42図 11～19号溝状造構平面図

13号溝状遺構（第42図）

(13号-A) A・B-11グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は長さ370×幅50cm、深さは確認面より-20cmを測る。11号、12号、13号-B、14号溝状遺構を切り構築される。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

(13号-B) B・C-11グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は長さ140+ α ×幅55cm、深さは確認面より-25cmを測る。13号-A、11号溝状遺構に切られており、12号溝状遺構を切り構築される。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

14号溝状遺構（第42図）

A-11グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は東西を13・15号溝状遺構に切られるため、全容は不明であるが、長さ45+ α ×幅50cm、深さは確認面より-20cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

15号溝状遺構（第42図）

A-11グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は長さ200×幅70cm、深さは確認面より-25cmを測り、14号溝状遺構の東側を切り構築される。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

16号溝状遺構（第42図）

C-12・13グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は長さ200×幅60cm、深さは確認面より-25cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

17号溝状遺構（第42図）

C-13グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は北側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ150+ α ×幅40cm、深さは確認面より-30cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

18号溝状遺構（第42図）

C-14グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は北側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ150+ α ×幅40cm、深さは確認面より-30cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

19号溝状遺構（第42図）

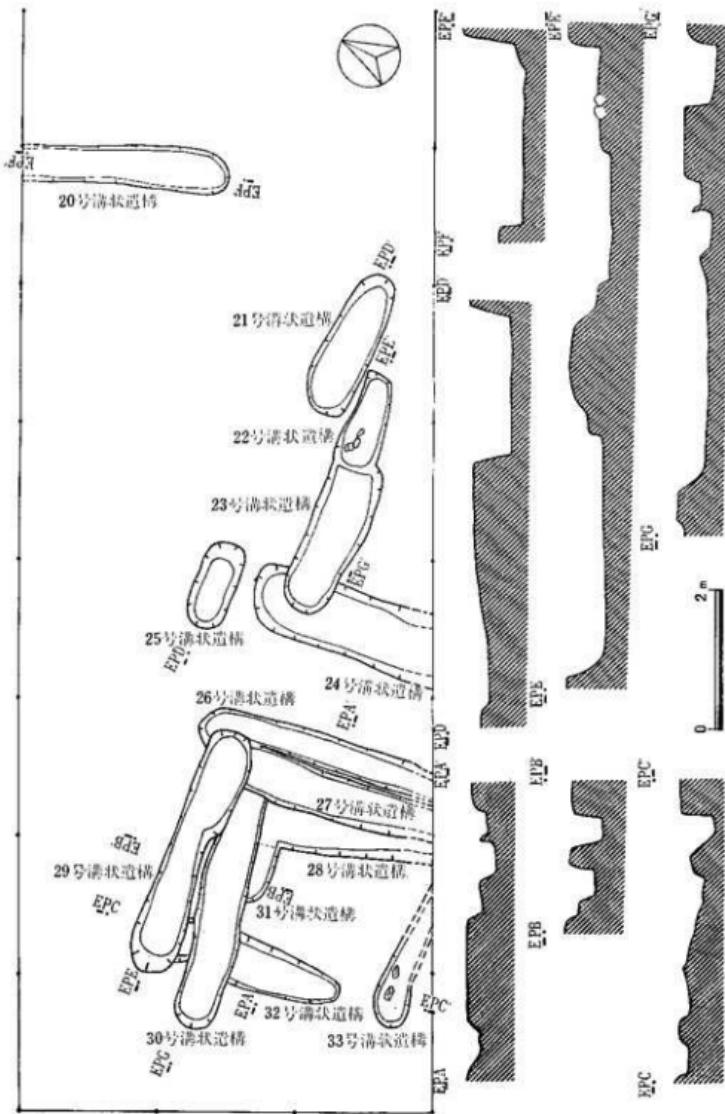
C-15グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は北側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ110+ α ×幅60cm、深さは確認面より-30cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

20号溝状遺構（第43図）

B-33・34、C-33・34グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は北側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ300+ α ×幅70cm、深さは確認面より-35cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、底面は凹凸がある。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

21号溝状遺構（第43図）

A-34・35グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規



第43図 20~33号溝状造構平面図

模は長さ220×幅70cm、深さは確認面より-50cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

22号溝状遺構（第43図）

A-35・36グリッドに位置する。第Ⅲ層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は西側を23号溝状遺構に切られるため全容は不明であるが、長さ $140 + \alpha \times$ 幅60cm、深さは確認面より-35cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、底面には4つの礫がまとめて存在している。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

23号溝状遺構（第43図）

A-36・37グリッドに位置する。第Ⅲ層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は長さ240×幅80cm、深さは確認面より-60cmを測り、22・24号溝状遺構を切り構築される。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

24号溝状遺構（第43図）

A・B-37グリッドに位置する。第Ⅲ層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は南側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ $280 + \alpha \times$ 幅100cm、深さは確認面より-45cmを測る。側面を23号溝状遺構に切られる。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

25号溝状遺構（第43図）

B-36・37グリッドに位置する。第Ⅲ層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は長さ130×幅60cm、深さは確認面より-10cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

26号溝状遺構（第43図）

A・B-37グリッドに位置する。第Ⅲ層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は南側が調査区域外並びに北端を29号溝状遺構に切られているため全容は不明であるが、長さ320×幅50cm、深さは確認面より-25cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

27号溝状遺構（第43図）

A・B-28グリッドに位置する。第Ⅲ層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は南側が調査区域外並びに北端を29号溝状遺構に切られるため全容は不明であるが、長さ $280 + \alpha \times$ 幅60cm、深さは確認面より-40cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

28号溝状遺構（第43図）

A-38・39、B-38・39グリッドに位置する。第Ⅲ層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は南側が調査区域外並びに北端を30号溝状遺構に切られるため全容は不明であるが、長さ $380 + \alpha \times$ 幅50cm、深さは確認面より-18cmを測り、32号溝状遺構の東側を切り構築される。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

29号溝状遺構（第43図）

B-30・31、C-31グリッドに位置する。第Ⅲ層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は長さ370×幅70cm、深さは確認面より-50cmを測り、26、27、30、31号溝状遺構を切り構築される。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

30号溝状遺構（第43図）

B—38~40, C—40グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は北側を26, 29号溝状遺構に切られるため全容は不明であるが、長さ $380 + \alpha \times$ 幅60cm, 深さは確認面より-50cmを測る。28, 31, 32号溝状遺構を切り構築される。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

31号溝状遺構（第43図）

A—40, B—39・40グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は北側を29, 30号溝状遺構に切られるため全容は不明であるが、長さ $240 + \alpha \times$ 幅70cm, 深さは確認面より-25cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

32号溝状遺構（第43図）

B—39・40グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は28, 30号溝状遺構に切られるため全容は不明であるが、長さ $90 + \alpha \times$ 幅30+ α cm, 深さは確認面より-15cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

33号溝状遺構（第43図）

A—39・40グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は東側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ $180 + \alpha \times$ 幅50cm, 深さは確認面より-14cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

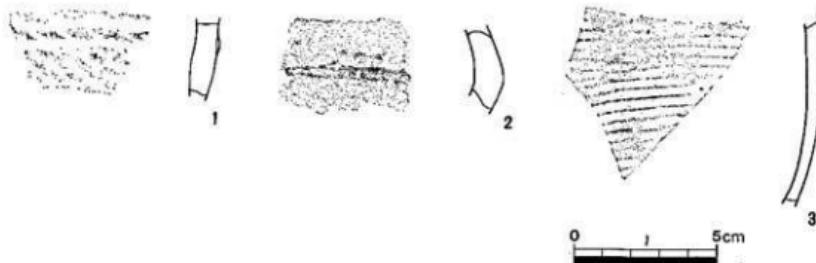
3 出土遺物

縄文土器

1はR Lの縄文を地文として、粘土紐を貼付し、管状工具でキザミ目を施している。胎土は白色粒子を含有し、焼成は良好である。色調は外面は黒色、内面は茶褐色を呈する。4号溝状遺構底面付近より出土した。前期諸縄文式に比定される。2はくびれ部の破片で、内外面とも管状工具による磨きが施されている。

須恵器

3は変形の胴部破片で、外面には平行印き目が施されている。胎土は精選されており、焼成は良好である。色調は暗灰褐色を呈する。



第44図 山梨原遺跡第3地点出土遺物

第4節 第4地点の概要と成果



1 概要

第4地点は、第3地点の西側にあり、調査区の最も西端に位置する。

本地点の層序は、基本的に8層に区分される。

第I層（表土）

第II層（耕作上） 第II層はII a, II b, II c層に細分される。II a層は耕作上である。II b層は水田耕作時におけるマサ（鋤き床）の面である。II c層は茶褐色土で、粘性が強く、赤褐色粒子を含有する。

第III層（黒褐色上） 標準上層に準ずる。

第IV層（黄褐色土） 第IV層はIV a, IV b層に細分される。IV a層は黄褐色粒子を多量に含有する。IV b層は3~5mm大の赤褐色、黄褐色、灰色スコリアを含有する。

第V層（暗褐色上） 部分的に黄味を帯びた箇所があり、粘性が低く、灰色スコリアを含有する。

第VI層（茶褐色土） 砂砾を含有する。

本地点から検出された遺構は、平安時代の土塙4基、中世以降の溝状遺構4基である。出土遺物は、包含層及び搅乱より繩文土器・土師器・陶磁器・磁石などが得られたが、いずれも細片で出土量も貧弱であった。遺構からは、カワラケ底部破片が2号溝状遺構覆土中に出土した。

2 遺構

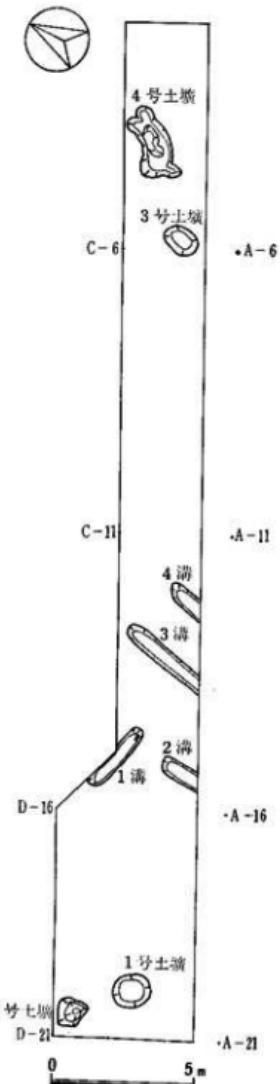
(1) 土 塙

1号土塙（第46図）

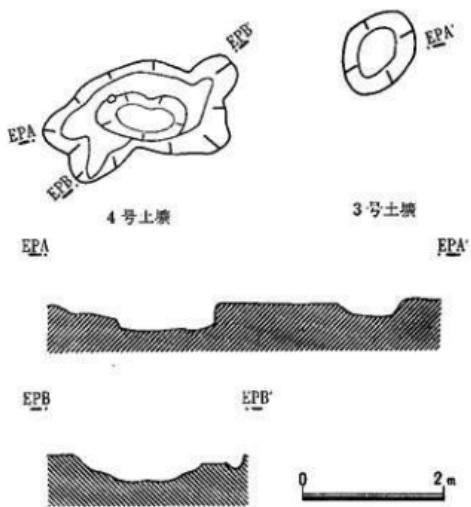
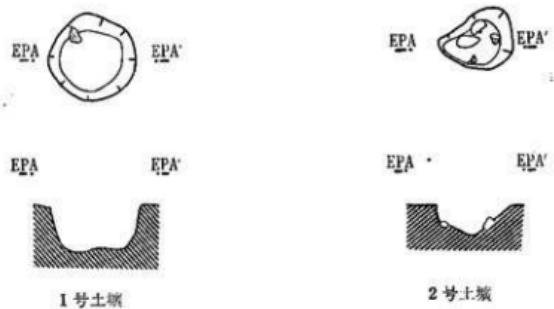
B-19グリッドに位置する。第IV層上面を精査中確認したもので、形状は円形を呈し、底面は凹凸があり、壁はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸130×短軸115cm、深さは確認面より-54cmを測る。覆土は黒褐色土で、覆土中により拳大的な溶岩砾が、散在する状況で約40個出土した。出土遺物はなし。

2号土塙（第46図）

C-19グリッドに位置する。第IV層上面より構築されており、形状は不規則円形を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸105×短軸85cm、深さは確認面より-40cm



第46図 山梨原遺跡第4地点全体図



第46图 1 ~ 4号土壤平面图

を測る。覆土は黒褐色土。出土遺物なし。

3号土塚（第46図）

A-5グリッドに位置する。第IV層上面より構築されており、形状は橢円形を呈し、底面は舟底状で、壁はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸125×短軸90cm、深さは確認面より-15cmを測る。覆土は黒褐色土。底面付近より縄文土器片1点（時期不明）が出土した。

4号土塚（第46図）

B-3・4グリッドに位置する。第IV層上面より構築されており、形状は南・北部が張り出した不整形を呈し、底面は中央部が段をもって落ち込み、最深部へ移行している。規模は長軸270×短軸150cm、深さは確認面より-50cmを測る。覆土は黒褐色土。出土遺物なし。

(2)溝状遺構

1号溝状遺構（第47図）

B-14、C-15グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は東西方向である。規模は長さ250×幅70cm、深さは確認面より-70cmを測る。覆土は茶褐色土。床面に礫が存在している。出土遺物なし。

2号溝状遺構（第47図）

A・B-15グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は南側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ136+ α ×幅55cm、深さは確認面より-24cmを測る。覆土は茶褐色土。覆土中よりカワラケの底部破片が出土した。（第48図）

3号溝状遺構（第47図）

A-14、B-13グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は南側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ324+ α ×幅60cm、深さは確認面より-65cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

4号溝状遺構（第47図）

A-12グリッドに位置する。第III層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は南側が調査区域外のため全容は不明であるが、長さ110+ α ×幅60cm、深さは確認面より-18cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

3 出土遺物

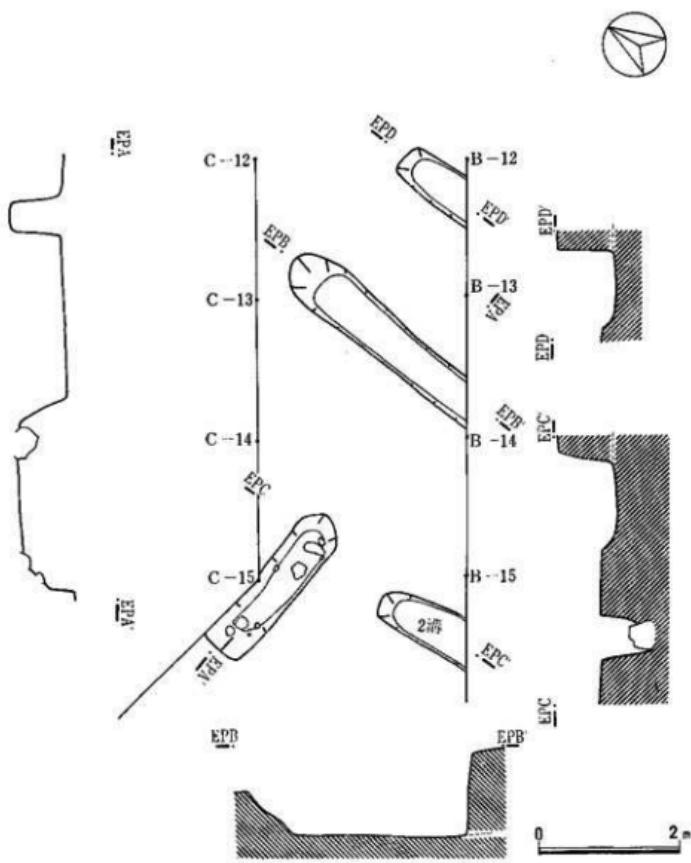
第4地点から出土した遺物は、土器類—縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・カワラケ、貨幣、石器などで、時期的には縄文時代・平安時代・中世・近世及びそれ以降のものである。

縄文土器

1は胴部破片で、棒状施文具による沈線が横位に施される。胎土に白色粒子を含有し、焼成は良好。色調は黄褐色を呈する。後期彌ノ内1式に比定される。

須恵器

2・3とも器面に叩き目を施している要形と思われる胴部破片である。2は外面に平行叩き目痕、胎土は白色粒子を含有し、焼成は良好。3は2に比べ薄手な作りで、外面に平行叩き目痕、内面は同心円叩き目を施したのち、ナデられている。胎土に白色粒子を含有し、緻密である。焼成は良好。色調は外面は黒紫色、内面は黒灰色を呈する。



第47圖 1 ~ 4 号溝狀道構平面圖

土師器

4は菱形土器の底部破片である。外面に縦位に刷毛目調整が施され、底部には木葉圧痕が認められる。胎土に白色粒子を含有し、精選されておらず緻密さを欠く。焼成は良好。色調は茶褐色を呈する。5は壺形土器の底部破片である。箇ナデが施されている。胎土は精選されており、緻密である。焼成は良好。色調は黄褐色を呈する。

陶磁器

茶碗（6・16）

6は口縁部破片で、白済した灰緑色の灰釉がが均一にかけられている。器面にはゆるやかな模を残しており、一部に焼成の際に生じた不純物が付着している。16は高台部破片で、底部内面にはべっ甲色の鉄釉がかけられており、高台は削りにより作り出されている。6・16は瀬戸・美濃の製品である。

鉢（7・8）

7はコネ鉢の口縁部破片で、一様に横ナデが施されており、口唇断面は凹状を呈する。胎土に白色粒子を含有し、焼成は良好。色調は暗黄褐色を呈する。8はスリ鉢の口縁部付近の破片で、内面に条線が施されている。胎土は細砂粒を含有し、吸水性がある。焼成は良好。色調は黒紫色を呈している。7は常滑、8は瀬戸・美濃の製品である。

甕（9～15）

いずれの破片も常滑系陶器として一括されるもので、諸褐色を基調とし、焼成は概して良好である。

徳利（17）

底部破片で、黄味がかった緑灰色の釉がかかっている。内面には稜を明顯に残しており、胎土は精選され、焼成は良好である。江戸時代末期～明治時代の製品である。

カワラケ

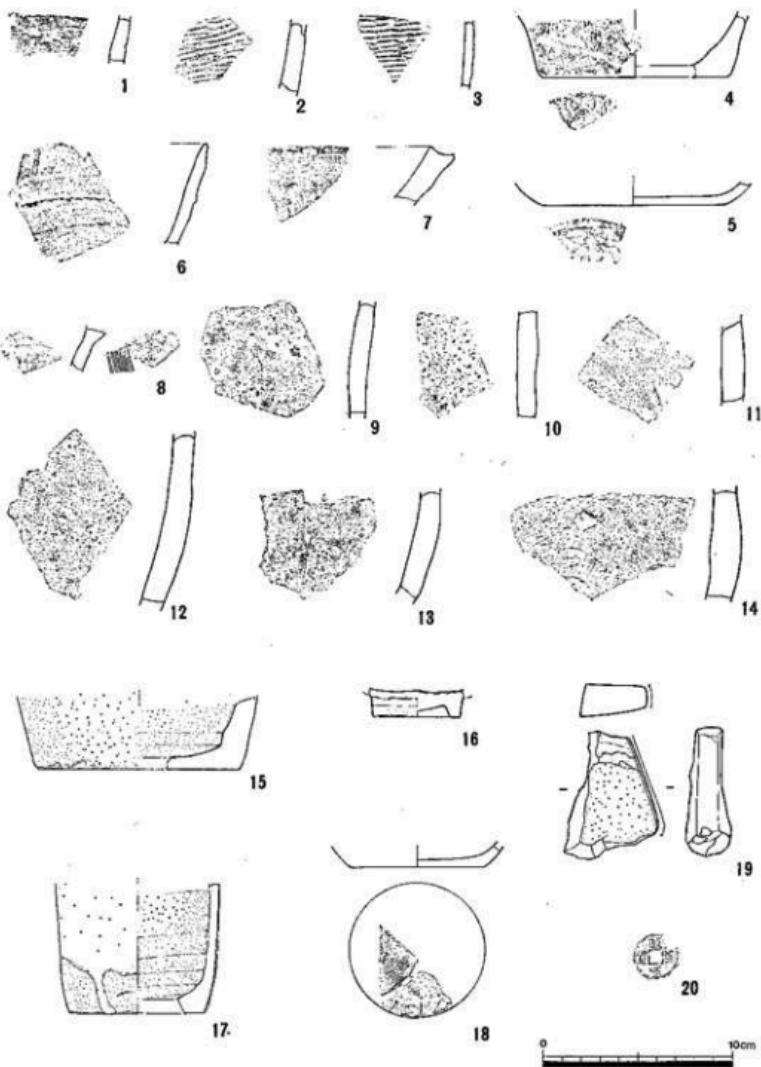
18は2号構造構の覆土中より出土したもので、左回転の糸切り模を明顯に残す底部破片である。胎土は精選されており、焼成は良好である。

砥石

19は薄い偏平状のもので、側面を砥面としている。硬質の泥岩製品である。

貨幣

20は、北宋錢で初鎊が1111年の「政和通宝」である。1号土塙のプラン検出作業中出土したもので、土塙に伴う可能性もある。



第48圖 山梨原遺跡第4地点出土遺物

第V章 まとめ

第1節 概要

今回の本遺跡の調査は、調査対象範囲が限定されていたために、遺跡の全貌を明らかにすることは至らなかったが、ちょうど調査地区が遺跡に東西方向のトレンチを入れたようなかっこうになり、大明見溶岩上及び、その末端における遺跡の概要の一端を知り得るに至った。

大明見溶岩は、富士山より発し、都留市十日市場小篠神社付近にまで達するもので、今回の調査では、第2～4地区が、この溶岩上に位置する。この溶岩の流出時期はまだ不明であり、またこの溶岩上の発掘調査も、今回が初めてである。

第2～4地区からは、平安時代の土塙9基、中世以降と思われる溝状造構44基が検出された。これらの造構の性格については、まだまだ類例を待つて検討しなければならないが、この溶岩上の土地利用は、平安時代になって初めて着手され、中世以降本格化したことが判明した。

大明見溶岩末端に位置する第1地区では、縄文時代の造構として、住居址4軒、土塙9基、集石1基、礫群、小穴址等が検出され、出土遺物としては、縄文時代早期から同時後期の上器・石器が認められた。この第1地区の北側300mには、豊富な湧水地があり、この湧水地を中心とした遺跡の占地が考えられる。

第2節 縄文時代の造構

1 住居址

第1地点において、4軒の住居址（第1～4号住居址）が検出された。これらの内、第1・3号住居址は、北側半分が調査対象地区外にあったため全容を明らかにすることはできなかったが、第1・2・4号住居址は円形プラン、第3号住居址は隅丸方形プランを呈するものであった。各住居址の時期は、第2・4号住居址が諸磯b式期、第3号住居址が藤内1式期、第1号住居址が堀ノ内1式期、にそれぞれ属する。

2 土塙

第1地点において、8基の土塙が検出された。これらの内、第2～8号土塙は円形プラン、第1号土塙は長椭円プランを呈し、断面形は、第2～4・6・7号土塙が“タライ状”，第5号土塙が“ロート状”，第8号土塙が不整形を、それぞれ呈していた。これらの構築時期は、第1・2・4～6号土塙が縄文時代前期諸磯b式期に、第7号土塙が縄文時代早期に、それぞれ求められる。次に、その機能・性格についてであるが、明確に実証し得る資料は残念ながら得るに至らなかったが、第1・2・4～6号土塙の確認面、第VI層上面では溶岩礫群が広がっており、礫群と土塙との関係が注目される。特に、第5号土塙においては覆土上部に5～15cmの大の溶岩礫が密集した集石を伴っていた。また、第2号土塙では打製石斧・磨石などの石器、第4号土塙では砥

石状の石が、それぞれ収蔵または、設置されているかのような状態で認められた。これらも、この遺構の性格を考える上で、注目に値しよう。第8号土塙は、人為的に構築されたものではなく“風倒木痕”と思われ、縄文時代早期における植生を考える上で興味深いものである。

第3節 歴史時代の遺構

1 土 塙

第2～4地区において、13基の土塙が検出された。これらの土塙は、覆土が黒褐色土のもの、茶褐色土のもの、と2群に類別される。この内、前者は当地域において、平安期の遺構の覆土となっているもので、間接的ながら、土塙構築時期を考える上で参考となり得るものである。

この平安期の土塙は、円形または隅九方形形状のプランを呈するもので、底面は平坦なものが多く、また、その配置は規則的なものは認められない。したがって、これらの土塙が建物址に関係する可能性は少く、その性格については不明である。このような土塙の類例は、市内において、小形山宮跡遺跡(註1)、同掘之内原遺跡(註2)、厚原牛石遺跡で発見されている。特に、宮跡遺跡においては、本遺跡と同様に台地の先端部に立地し、調査によって土塙が28基検出された。

この宮跡遺跡の土塙も規則的な配列は認められず、建物址とは考えにくいものであり、沢をはさんで北側に、奈良・平安時代の集落址掘之内原遺跡が存在することから、耕作地等の生産の場としての所見を述べたことがある。本遺跡で検出された土塙群についても、消極的ながら同様な性格付けを考えたいと思う。

後者の茶褐色土を覆土に持つ土塙は、溝状遺構と同様、中世以降の所産と考えられる。形状は平安期のものに比べて不整形のものが多く、規模が大きくなる。第4地区第1号土塙覆土上面から、北宋錢が1枚出土し、注目される。これが、この土塙に伴うとすると、六道錢であった可能性が生じ、平安期の土塙との性格の変化が想起される。いずれにしても、類例を待ちたい。

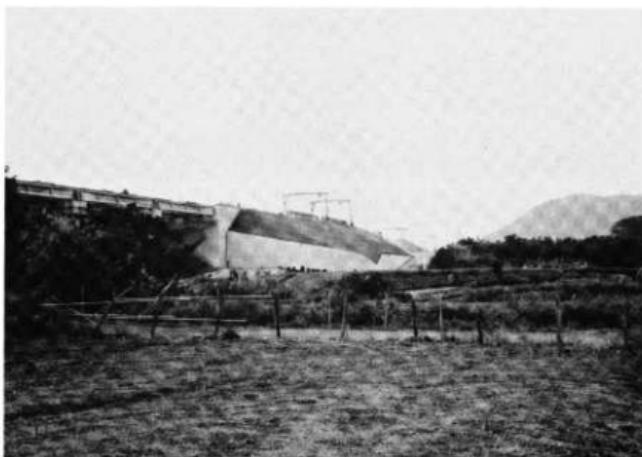
2 溝状遺構

第1～4地区において、45基の溝状遺構が検出された。これは、幅40～90cm程、長さ2～4m程のもので、主軸方向は南北方向、東西方向の直交する両者が認められる。出土遺物は、ほとんど認められなかつたが、第4地区第2号溝状遺構覆土中より、カワラケの底部破片が出土し、この溝状遺構構築時期を知る手掛りを得た。この溝状遺構の性格を積極的に物語る資料は、今回の調査では得ることができなかつたが、土塙と同様、建物址とは考えにくいものであり、また、各溝はそれそれが連結せず、別個に存在しているため、水路址、境界址等とも考えられない。

今後の類例を待ちたい。

註1 中谷・宮跡遺跡発掘調査報告書 1981 都留市教育委員会

註2 別之内原遺跡発掘調査報告書 1980 タ



遺跡遠景（現在）



遺跡遠景

図版 2

第 1 地点(2)



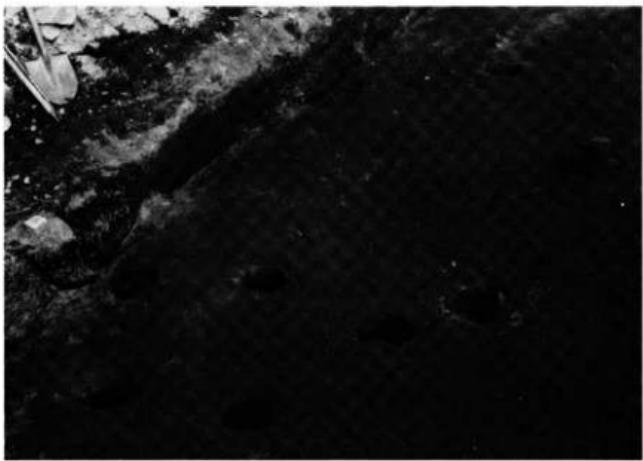
第 1 地点調査区全景



第 1 地点発掘調査風景



調査区中央部遺構分布状況



1号住居址（西南より）

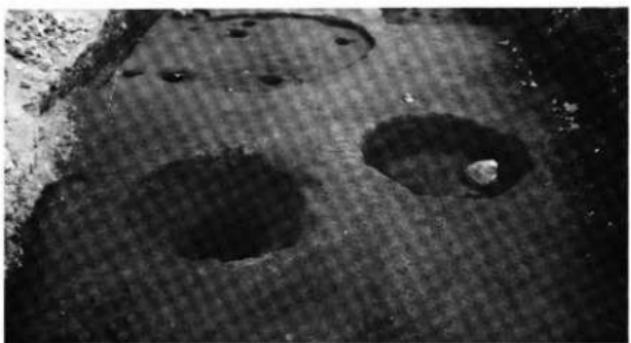
図版 4
第1地点(4)



2・3号住居址（南西より）



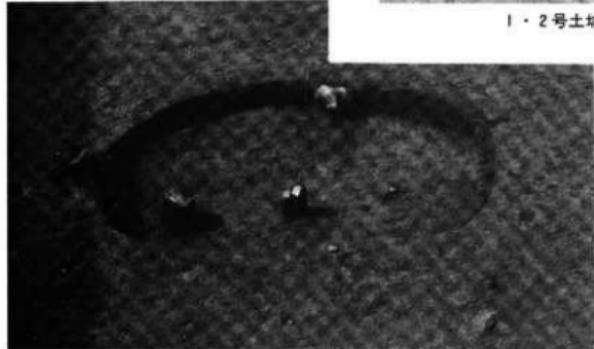
4号住居址（南西より）



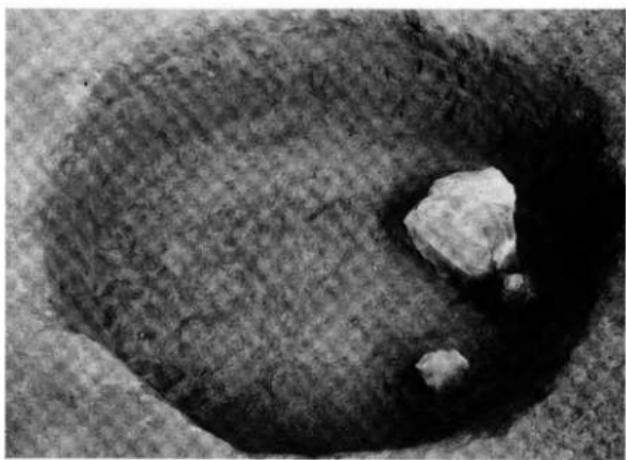
2・3号住居址、4・5号土塙（西より）



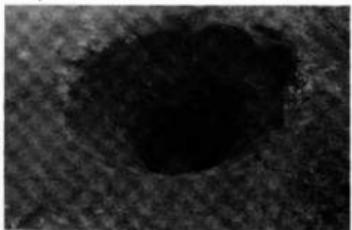
1・2号土塙（西より）



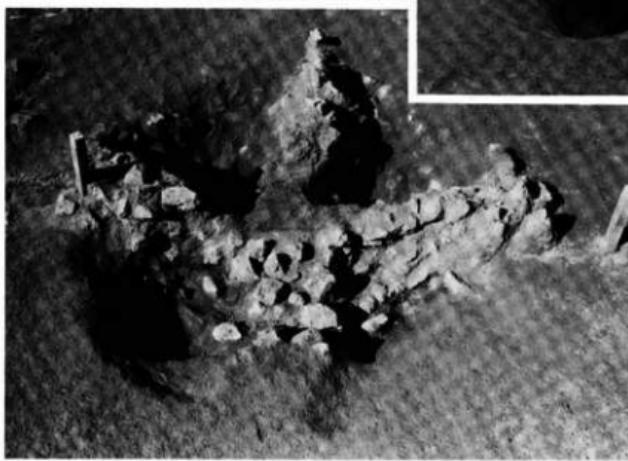
6号土塙（西より）



4号土塹（西より）



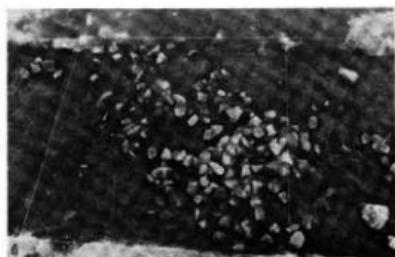
5号土塹完掘状態（北西より）



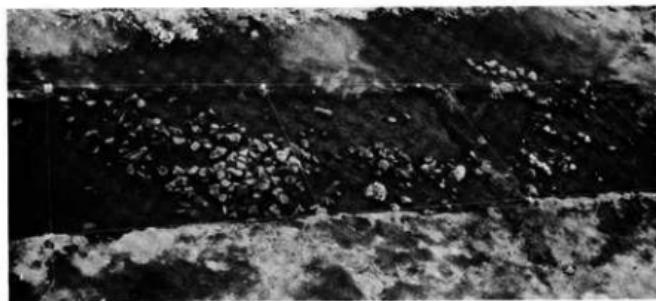
5号土塹上面礫群（南より）



第VI層中の礫群（南西より）



第VI層中の礫群（北より）



第VI層中の礫群（南より）



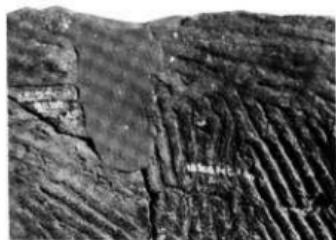
1号溝状遺構（西より）



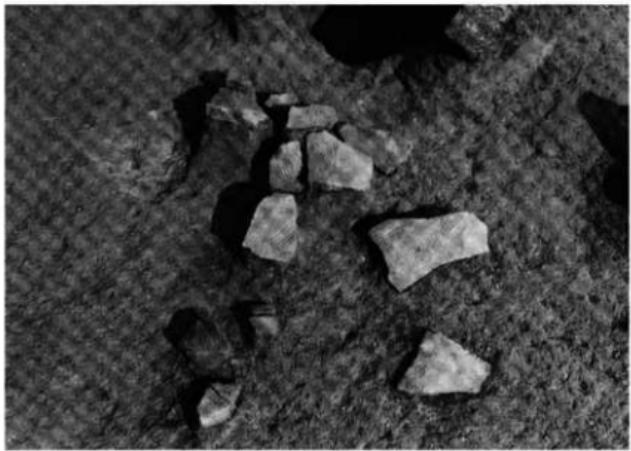
2号溝状遺構（南より）



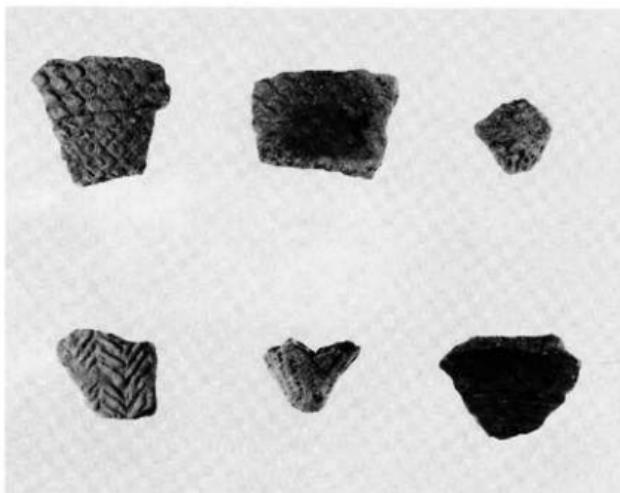
口唇部



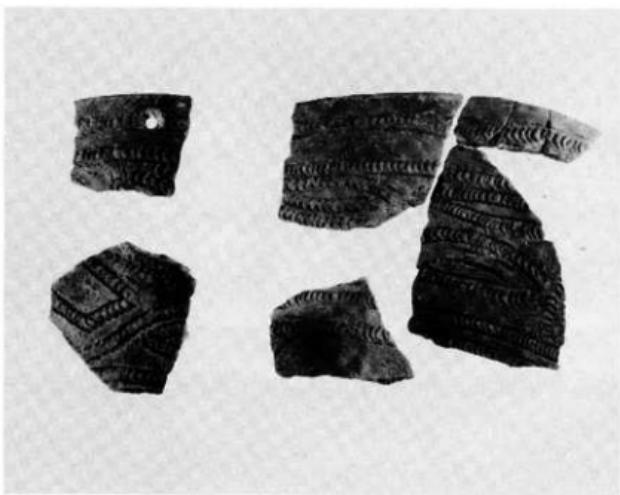
內 面



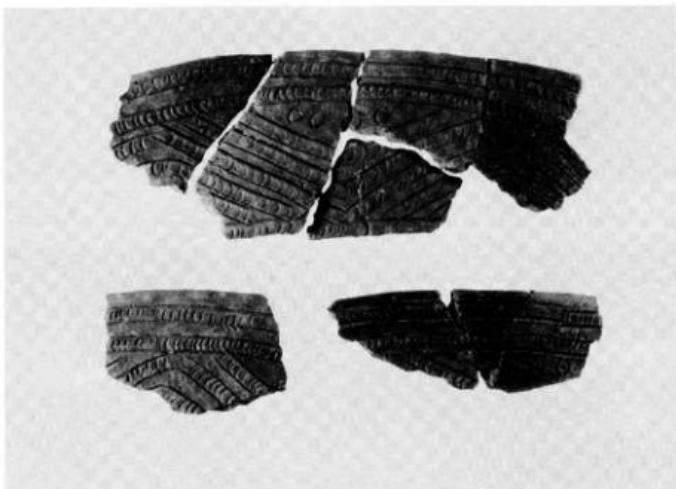
出土狀態 (第 2 群土器)



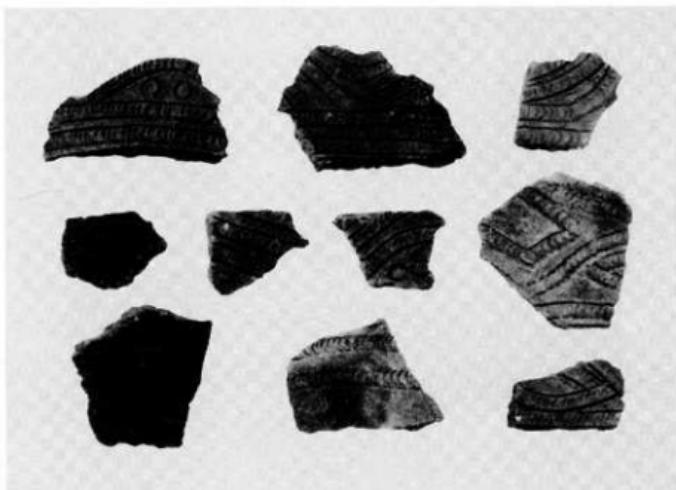
第 1・2 群土器



第 3 群土器



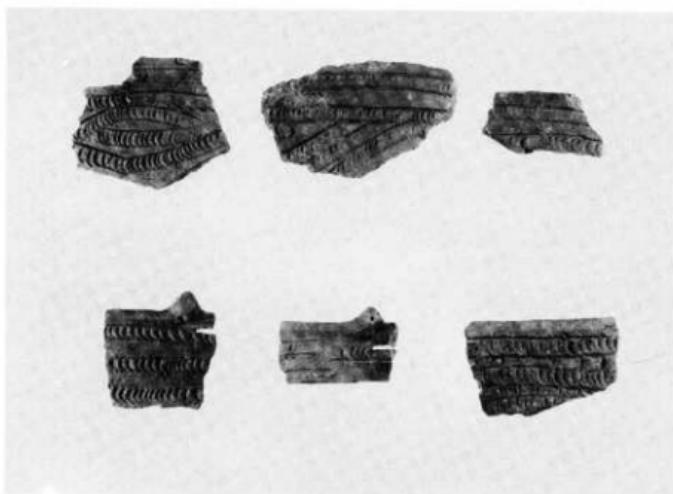
第 3 羣土器



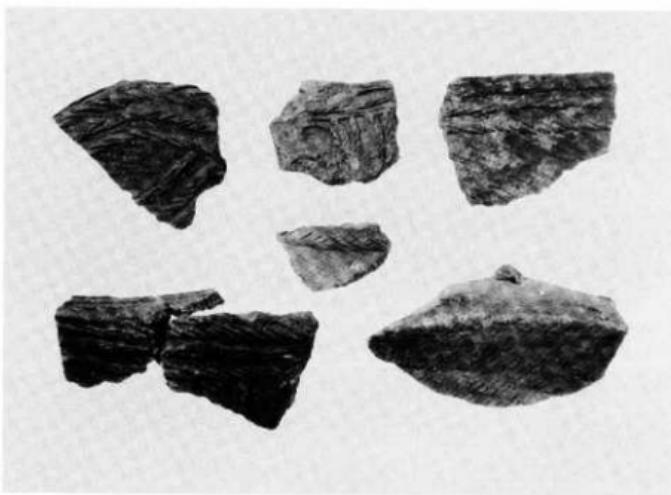
第 3 羣土器

圖版 12

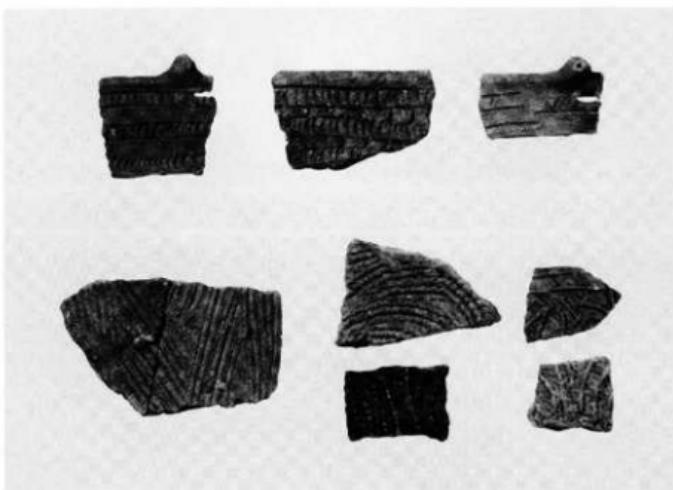
第 1 地點(12)



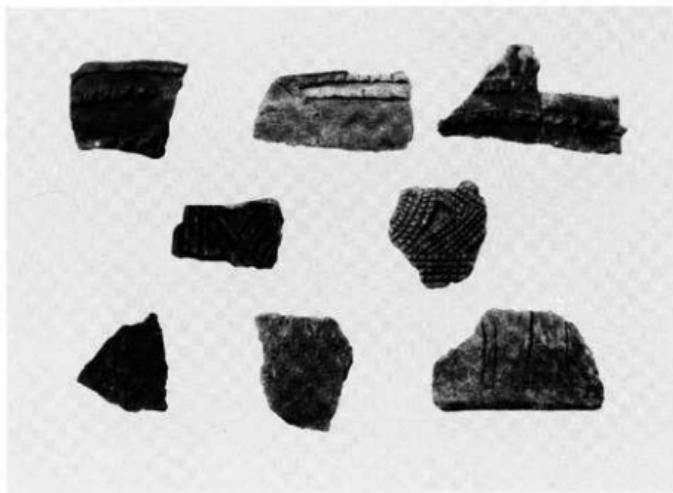
第 3 羣土器



第 3 羣土器

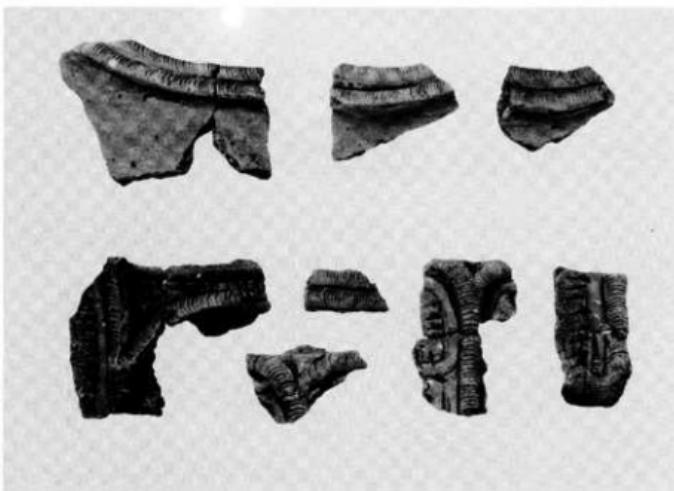


第3・4群土器

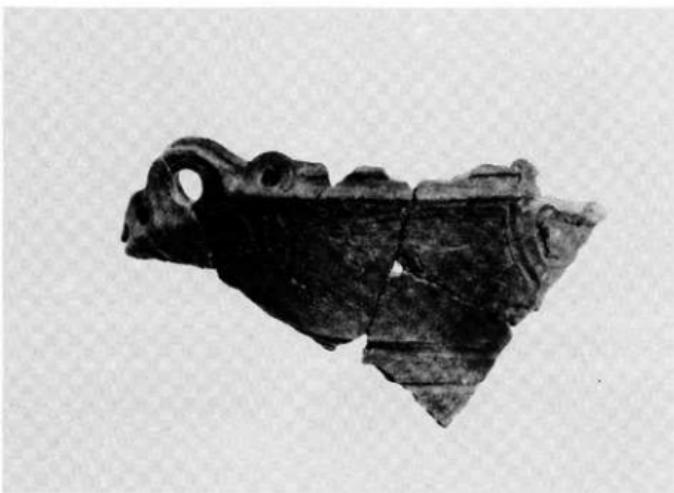


第4・5群土器

圖版 14
第 1 地點 04



第 6 羣土器



第 7 羣土器



(外面)



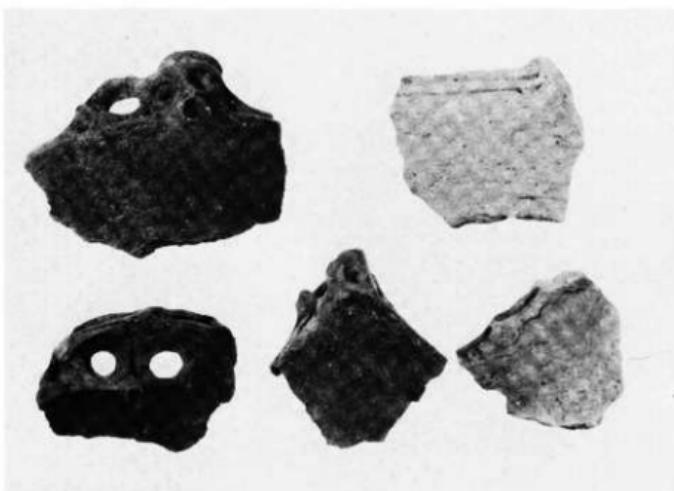
出土狀態（第 7 群土器）



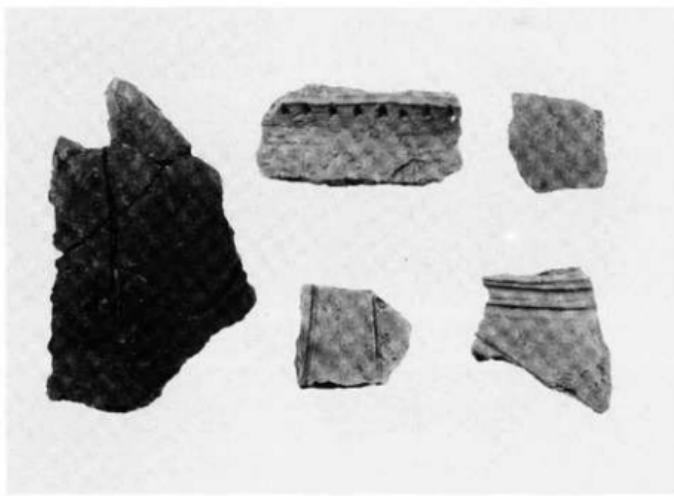
(内面)

圖版
16

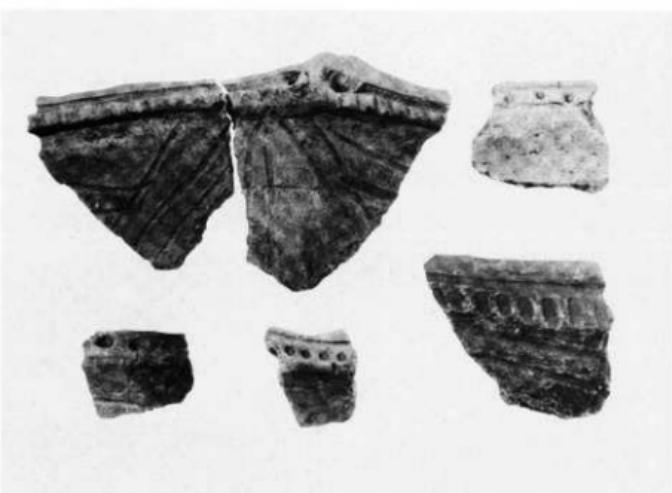
第1地點
(6)



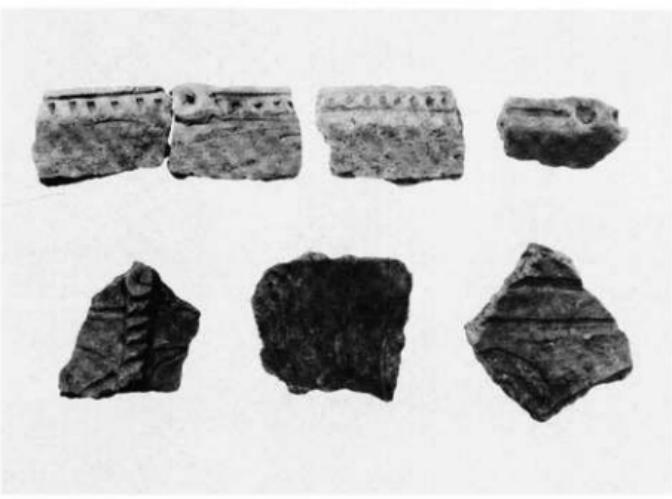
第7群土器



第7群土器



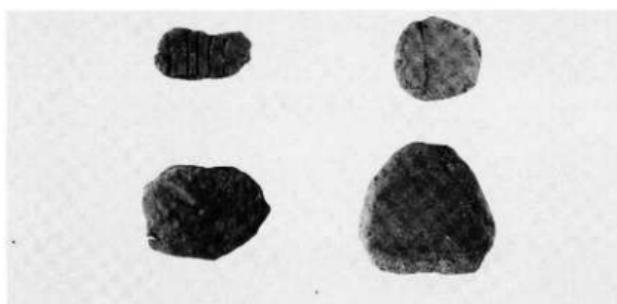
第 7 群土器



第 7 群土器



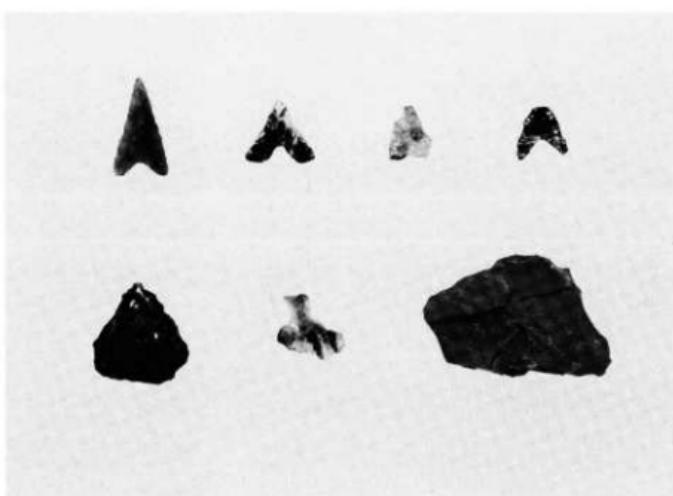
第 7 羣土器



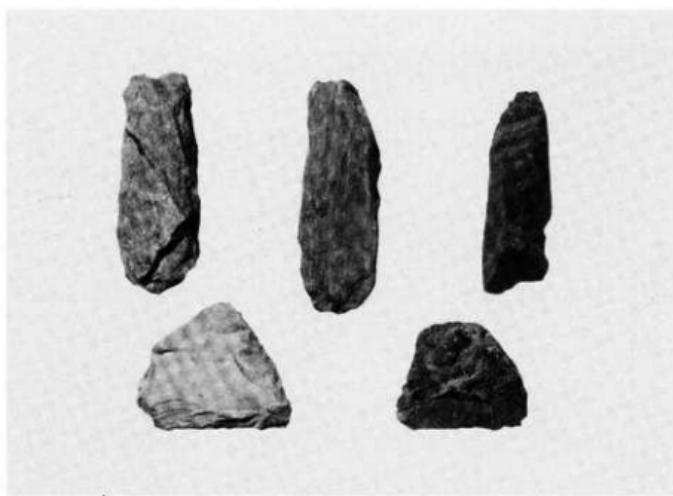
土器片錠（上左隅），他は土製円盤



玩 具

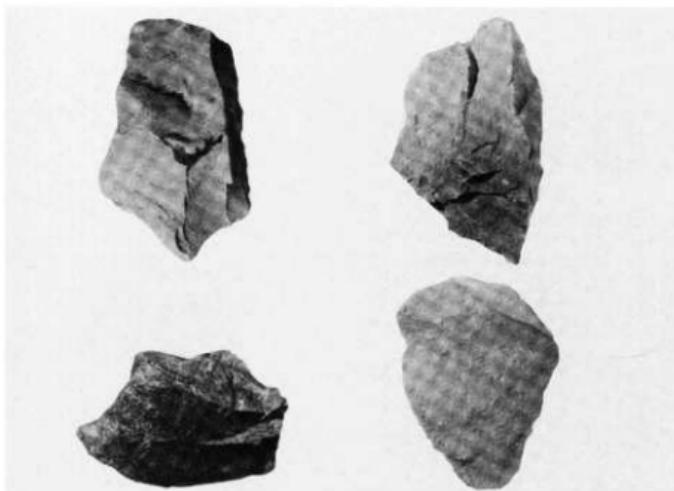


石器（石錐・石匙・スクレイバー）



石器（打製石斧・横刃型石器）

圖版 20
第一地點



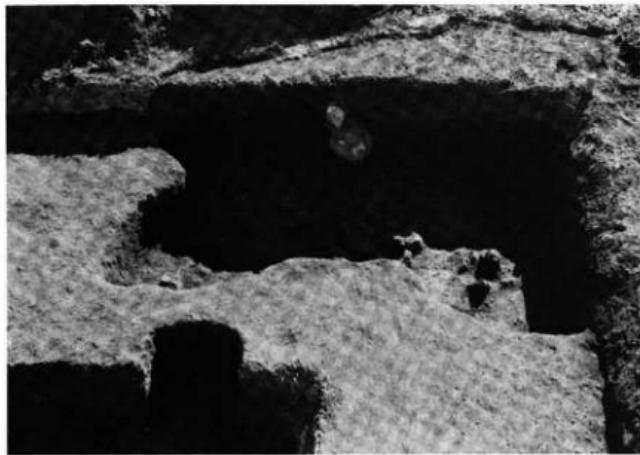
石器（粗大石器）



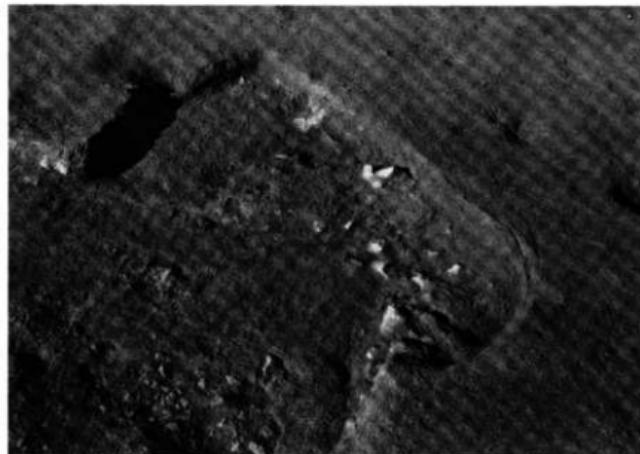
石器（磨石）



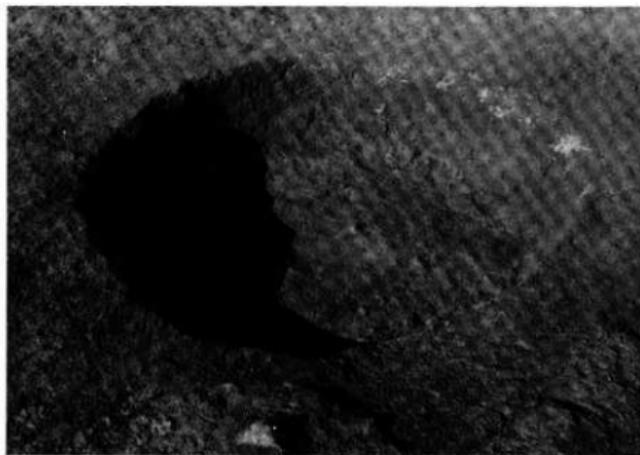
調査風景



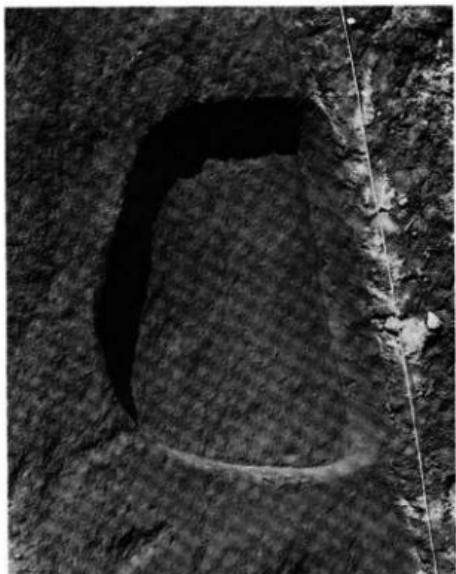
1～3号土塙（北から）



4・5号土塚（南から）



6号土塚（南から）



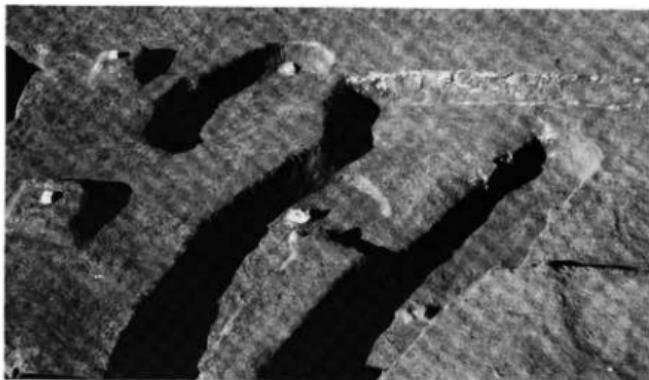
7号土塚（東から）



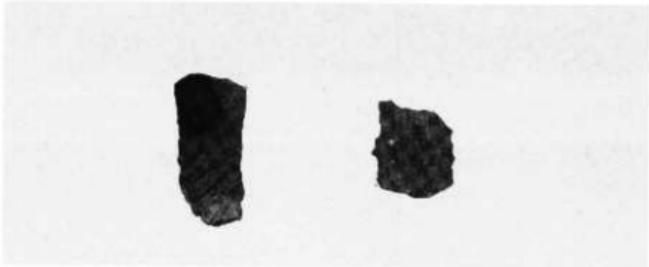
8号土塚（東から）



調査区西側の溝状遺構群（東南より）



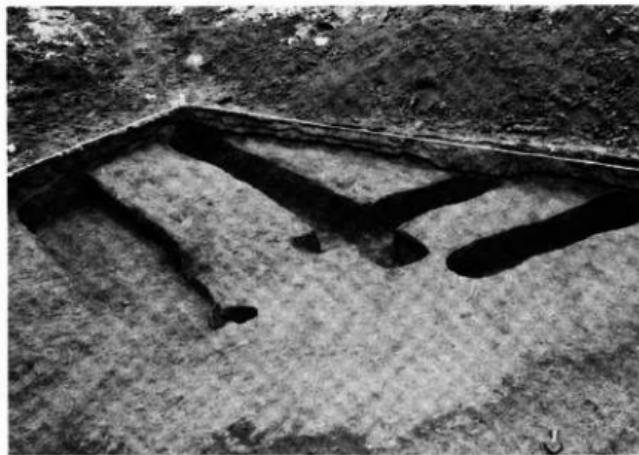
5～7号溝状遺構（南より）



出土遺物（左・縄文土器、右・土師器）



調査風景



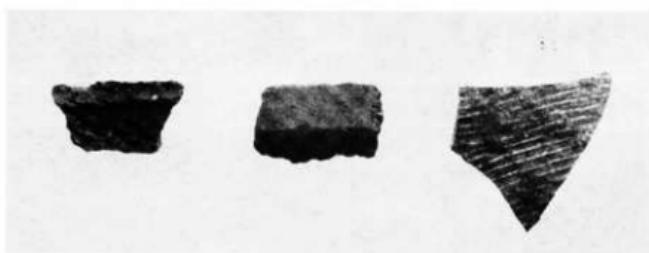
1～4号溝状遺構（西より）



1号土塙・6~10号溝状遺構（南より）



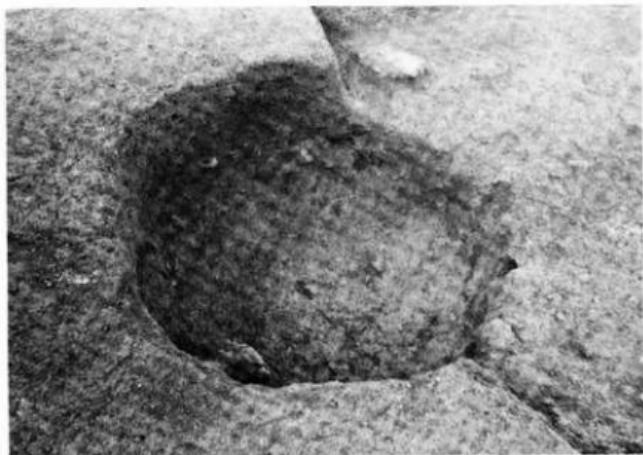
26~33号溝状遺構（東より）



出土遺物



調査風景



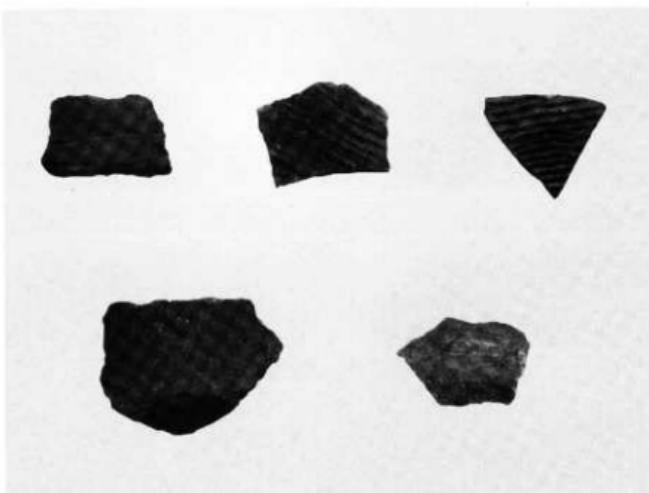
1号土塗（南より）



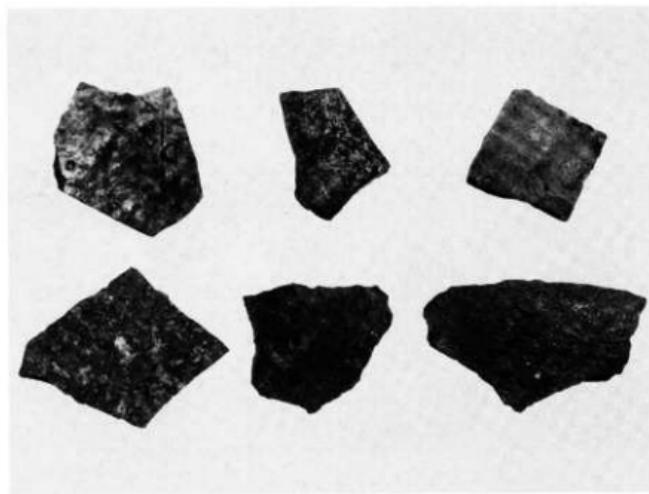
2号土塚（西より）



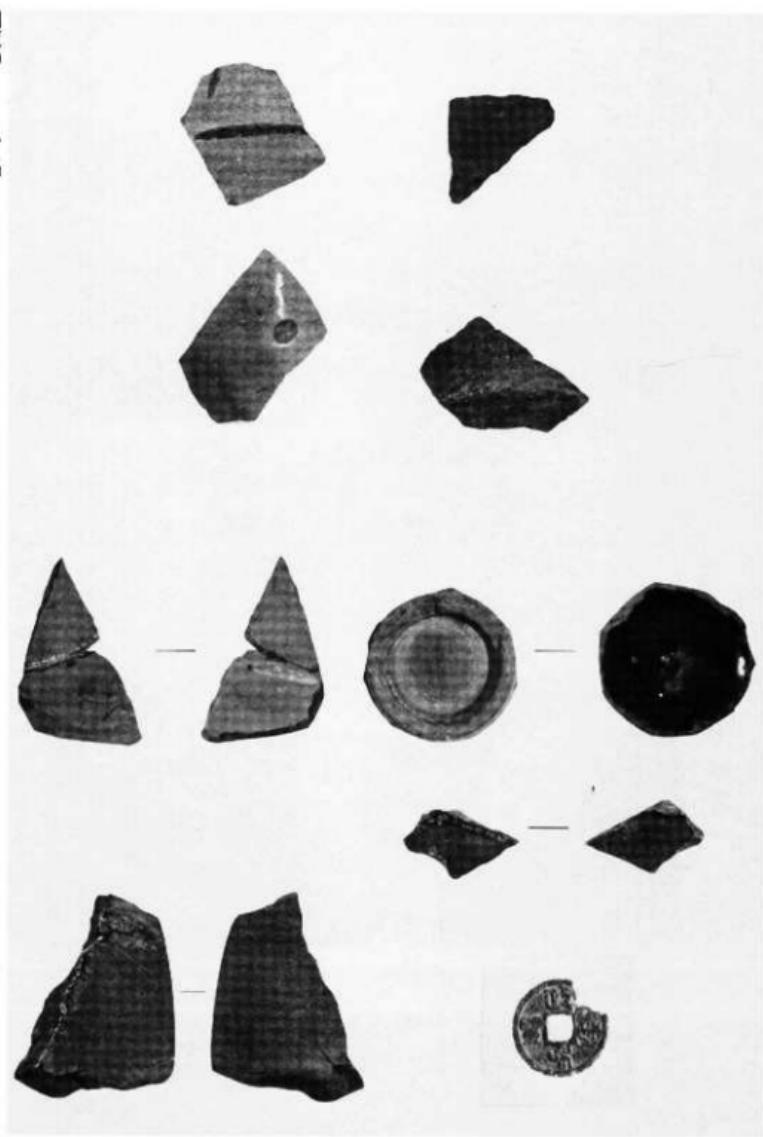
溝状遺構全景（西より）



出土遺物（縹文土器・土師器・須恵器）



出土遺物（陶器）



出土遺物（陶器・磁器・カワラケ・砥石・貨幣）

山梨原遺跡
中央自動車道富士吉田線四車線化
工事に伴う発掘調査報告書

発行日 昭和 57 年 3 月 31 日

編集 都留市教育委員会

発行 都留市教育委員会
日本道路公団東京第二建設局

印刷 第一法規出版株式会社
東京都港区南青山2-11-17
TEL 03-404-2251(大代表)

